

---

# ゼロの使い魔は超能力者

惺黎莫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロの使い魔は超能力者

### 【Nコード】

N7719I

### 【作者名】

惺黎奠

### 【あらすじ】

毎日面白いこともなく、暇を嘆いていた小野瑛士

唯一の趣味の読書で暇を凌いでいた

ゼロの使い魔のサイトのようになってみたい

彼はそう思っていた

ある日のこと、彼の目の前に鏡が現れた

これは！？もしかして！

彼は躊躇いなく鏡の中へと飛び込んだ

## 暇な男

小野瑛士は今日も退屈していた  
毎日面白いこともなく、ケータイを確認する日々  
退屈で退屈で死にそうだった

小野瑛士 17歳

健全な高校生である

学校一の美男子と称され、友達も少なくない  
彼女もいる

テレビからオフアアがかかるとはよくあることだ  
しかし、こんな生活を彼は憂いていた

何のために生まれたんだろうか

唯一、彼の退屈を凌ぐ出来事が最近出来た  
それは読書である

彼はゼロの使い魔という本にハマっていた  
俺もこんな世界に行ってみたいと

ある日、いつものように退屈を嘆いていた彼の前に、鏡のような物  
体が現れる

校舎内なのでとても驚いたが、誰も気付いていなかった

これは面白い

好奇心の強い彼は、その鏡を眺めていた

これはもしかして?!

サモン・サーヴァントの鏡だろうか?

そう思っていると、彼の体は鏡の中へと入っていった

## 運命の出会い

「我が名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。宇宙の中のどこかにいる私の使い魔よ。神聖で美しく強力な使い魔よ。私は心から求め訴えるわ。我が導きに答えなさい！」  
ルイズは高らかに読み上げ、杖を振り下ろした  
ドン！

振り下ろした瞬間爆発が発生し、目の前が砂煙に覆われる

毎度恒例のルイズの失敗である

よくあることよ、とルイズは諦めているのだが、まさかサモン・サーヴァントでも失敗するなんて

やっぱり私はヴァリエール家になんか生まれなかった方が良かったのよ…

ルイズは自己嫌悪に陥った

「おかしいわねえ」

周りで見守っていたふくよかな体系の男子生徒が罵声を浴びせる

マリコル又だ

「一体何度やったら成功するんだ！ゼロのルイズ」

自分でも落ち込んでいなのに、周りからからかわれると余計に悔し  
くなる

「うるさいわね。ちょっと調子が悪いだけよ」

それにしても、なんで？

「……………ミス・ヴァリエール。次失敗したら、今日は終わりましたよ  
う」

コルベールは静かにいった

この言い方が一層傷つくことをコルベールは知っていない

落ち込んだルイズは助けを求めるように辺りを見渡した

が、助けるものなど何も無い

「待って」

クラスメイトのモンモランシーが煙の方を指差していった

「煙の中に誰がいるわ」

モンモランシーの言葉で、皆煙の方を見た  
煙が薄くなっていく

そして、皆は信じられないものを見た

見上げれば、青い空

見渡せば、緑一面の広場

そして、中世ヨーロッパ風の建物

日本にこんな景色は存在するのだろうか

いや、しない筈だ

目の前にいる人達が否定させるからだ

日本にマントをした人なんてそういない

日本に魔法の杖を持って歩く人などいないだろう

では、ここはどこなのか

俺は答えを知っている

ここは……

「あなた、誰？」

妄想の余韻に浸っているエイジは目の前の少女に話しかけられたと  
いうことに気がつくまでに少ししかった

「ああ、申し訳ない。もしかすると、ルイズ・フランソワーズ・ル・  
ブラン・ド・ラ・ヴァリエール様ですか？」

エイジはできるだけ丁寧な言葉で話しかけた

いや、話し返した

すると、目の前の美少女は目を大きく開き

「そ、そうよ。わたしはルイズ。何で私のこと知ってるの？」

と言った

目の前のウェーブのかかったピンクの髪の毛の少女こそ、ルイズだ

ここは、ハルゲニア

トリステインという小国のトリステイン魔法学院だ

地球では使えない魔法が自由(?)に使える世界  
エイジの理想の世界だ  
夢みたいだ

エイジは一人そう思った

「ふう。無事にサモン・サーヴァントは終了しましたな。次はコン  
トラクト・サーヴァントです。急ぎなさい」

側でコルベールが急かすようにいった  
目が早くしると訴えている

「良いのですか？」

ルイズは思わず聞いてしまった

「何がですか？時間がおしている。早くしなさい」

しかし、ルイズは一向にする気配はない  
もじもじしているだけだ

「ルイズ様。急がれた方がよろしいかと。このあとにも授業があり  
ます。ここで時間を割くと、次の授業に支障をきたします」

エイジは自ら促すように声をかけた

それでやっとルイズは頷いた

「分かったわよ。準備はいい？我が名は、ルイズ・フランソワーズ・  
ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。

この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

そう言うと、ルイズが口を近づけてきた

これが契約、か

エイジもゆっくりと唇を近づけた

そっと唇をつけると、すぐに離れた

ルイズが下を向いて赤くなっている

かわいいなあ、なんて思っている時だった

突然、左手に猛烈な痛みが走った

「う、うああああ!!」

叫ばずにはいられなかった

左手が焼かれているようにいたく、千切れそうだ

「だ、大丈夫よ？使い魔のルーンを刻んでいるだけだから」  
ルイズは慌てて声を掛けた

疑問系になっているのが怖い

エイジは痛みに耐えながら右手を振って、大丈夫だと伝えた

実際、大丈夫になったのは、それから少し後だけど

痛みがひいてから、改めて左手を見た

左手には、日本では見慣れない文字が浮かんでいた

ガンダールヴなのだろうか？

「ほう、見慣れないルーンだね。メモを取らせてもらおうよ」

コルベールはポケットから紙と筆記用具を取り出し、ルーンのメモを取った

「あなた、名前は？」

ルイズにそう言われて気がついた

未だ名前を覚えていなかった

「私は小野瑛士です。エイジって呼んでくだされば光栄で御座います」

「エイジ？変わった名前ね」

と言われた

それも当然だろう

この世界に日本語は存在しない

だから、こんな響きは珍しいのだ

「恐れ多くも、私はあなた様のことをなんとお呼びしたらよろしいのでしょうか？」

「ルイズ、ルイズでいいわ。それに、その言葉遣い疲れるから、普通に話してね」

「では、よろしくルイズ」

エイジはルイズに手を差し伸べた

ルイズは真っ赤になっていた

可愛いな、ホントに

「ちよつとルイズ、使い魔から離れなさいよ！」

突然、割って入るような声がした

褐色の肌に燃えるような髪の毛、ナイスなバディのキュルケだ  
キュルケはルイズに差し伸べたエイジの手を奪った

「ルイズには勿体なくてよ？」

キュルケはルイズに挑発的な態度をとった

「ちよ、ちよつとキュルケ。私の使い魔から離れなさい！」

キュルケに挑発されて乗らないほどルイズは大人ではなかった

二人の、取り合いに付き合っているエイジは、ふとある一人に目が  
いった

こんな中一人だけ本に熱中している女子生徒だ

タバサ本人だった

こうして、皆それぞれ自分の使い魔について話しているのに、ただ  
一人だけグループから外れていれば逆に目立つ

急にぐいつ！と引つ張られ、エイジはこけそうになった

引つ張ったのはルイズだった

華奢なのに意外と力が強い

そんなこんなしていると、タバサの姿が見えなくなってしまった  
数分後

「皆無事に召喚することが出来ましたな。では、今日の授業はここ  
まで」

コルベールはそう言うと、背中を向けて飛んでいった

皆もつられるように飛んで学院内へ戻る

この世界にきたことがまず凄いけど、魔法を見るとやっぱり異世界  
にきたんだなあーと思うエイジ

不可能なことを可能にした瞬間を目の当たりにし、すっかりと興味  
を持っている

退屈していた世界から抜け出すことができまんぞくだった

「ルイズは歩いて帰って来なさいねー」

キュルケの声が空からした

ルイズは歯を食いしばって唸っているだけ

そう、ルイズは魔法が上手く使えないのだ

今の時点では、だが…

空から皆の笑い声が聞こえる

ルイズはまた唸った

そして、ぼーっとする

やがて、ふう、とため息をつくとき、トボトボと歩き出した

傍らから見ると、とても可哀想だった

エイジはこの世界に来て本当に間もないが、ルイズに対する保護心が湧いてきた

護りたい

出会って時間にして10分

しかし、この思いはいつまでも変わらないと思う

何故だろうか…

分からなかった

しかし、この小さな体を傷つけさせたくない

危険な目に遭わせたくない

ルイズの背中を見つめるエイジの顔が一瞬険しくなる

不意にルイズは後ろを振り返る

ふと見たエイジの心境を知ってか知らずかニツコリと笑い

「行くわよ、エイジ」

といった

二人のこの出会いは、これから起こる様々な出来事のほんの一瞬の事だった

## 運命の出会い（後書き）

かなり修正しました。

結局、駄文にかわりはないんですけどね。

## 食い違い

「ルイズ、おーい！ルイズ」

部屋に戻ってルイズはやつとここがどこか分かった

「あ、あ、あ、…」

「そんなに緊張するな。アハツ、ルイズは可愛いな」

「えっ？はっ？あ、あのその」

サイトの時、もつと喋っていたのにな

犬！っていつてくれないのかな？

「どうしたんだよ、ちゃんと喋ってほしいな」

「だ、だって。人間の使い魔を呼び出したことなんかなかったから、緊張して。ねえ、迷惑じゃない？」

「全然。むしろウエルカムだよ。俺は運がいいな。ルイズに召喚されるなんて、夢にも思わなかったよ」

もともと、召喚されと自体、あり得ないんだけどな

あんなことってあるんだなあ

ルイズは俺をみでずつとぼーつとしてるんだけど

大丈夫かあ？

「……………私って、なんて運がいいのかしら」

やつと喋ったと思ったら、なんなんだ？

「……………エイジ」

「ん？何？」

「エイジは、使い魔として召喚されたんだから、えーっと、私の使い魔よ。つまり、私の使い魔で、私のものよ」

はい？

おんなじ事何回も言ってるような気がするんですけど

「えーっと、要するに何が言いたいのでしょうか？ご主人様」

「え、えーっとね、私の使い魔なんだから、私の好きにしてもいいのよ。分かる？」

「うん、分かる」

「だから、何されても文句言わないでね」

「分かったよ」

おかし

小説では、『はあく、どうしてこんな冴えない生き物が私の使い魔なの?』だった筈だ

ストーリー変わるんじゃないか?

「だから、ね、急にキスとかされても驚かないですよ?」

「はいはい、わかり……ご主人様? 御自分の言っている意味、分かつておられますか?」

「分かつてるわよ! ……勿論、エイジがキスしてきても、全然驚かないんだからね!?!」

をい!

ルイズが暴走してるぞ!

「分かった、分かったから落ち着こう、な?」

「うん」

やっと落ち着いてくれたか

そういえば、寝る場所どうしよう

ご丁寧に藁は準備されているけど

サイトはここで寝ていたな

犬扱いされながら

「ルイズ、俺どこで寝たらいいのか?」

サイトみたいに藁の上で寝てみようかな

「あの藁は、俺のために準備してくれたんだろ?」

「あ、とととんでもない。ベットで寝ていいわよ」

「でも、使い魔は使い魔らしい生活をしないと……」

「使い魔を管理するのは私よ。これは命令よ。ベットで寝なさい」

「でも、藁がもつたないじゃん」

「じゃ、じゃあ私が藁の上で寝るわ。それでいい?」

「いや、そうじゃなくて。俺は藁の上で寝てみたいんだよ」

「仕方ないわね。明日からはベッドで寝て。じゃないと、藁を処分するからね?」

ああ、可愛いなあ

「今日は遅いから、もう寝ましょ。お休み」

「ああ、お休み…あつ!」

そうだ!

この世界にきたらみてみたいものがあつたんだ

「な、何?どうしたの?」

「是非みたいものがあつてね」

カーテンを開けて夜空を見上げた

空には双月が浮かんでいた

「すごいよなあ。この世界の夜空はとても綺麗だ」

ルイズはエイジに見惚れていた

双月に照らされて、彼の美しい顔を引き立てるようで

「……かっこいい」

こんなにかっこいい人、初めて見たのだ

「何か言ったか?ルイズ」

「ひゃあ、い、いや、別に。おやすみなさい」

「おやすみ、ルイズ」

翌朝

今日は虚無の日

「ルイズ、もう朝だから起きないと」

確かこの後、選択を命じられる筈だ

「ん、んんんん、はあ、つて、あなた、「エイジだよ。忘れたのか?」」

この辺は小説と変わらないな

「ああ、昨日召喚したんだっけ」

ルイズは朝に弱いらしい

これも小説と変わらないな

「着替え準備しようか？」

サイトは準備しなかったから、気が利かないと怒られていたけど  
「え?! いいいいいいのよあなたは何もしなくて。私の使い魔なんだからね」

「じゃあ、俺は何したらいいの?」

「退屈だ」

「つまらねえよ」

「サイトは退屈しなかっただろうに」

「ここに来てまでこんな扱いかよ」

「俺、洗濯でも部屋の掃除でも何でも雑用するよ」

「サイトみたく、ルイズに命令されてみたい」

俺はルイズのツンデレキャラが好きなんだけどなあ

「だって、エイジを働かせたら可哀想だし、周りの生徒から文句言われるもん」

「大丈夫だって。俺はルイズの使い魔だろ?」

「じゃ、じゃあ洗濯をお願いするわ。よろしくね」

「そうじゃなくて、『ばか犬! さっさと洗濯してきなさい!』とでも言ってくれたほうが楽なんだけど」

「ば、ばばばばばか犬だなんて、言える訳ないじゃない!」

これ以上言っても無駄か…

俺はサイトのような扱いをされてみたいんだけどな

俺、M体質じゃないぞ!

けど、こんな扱いばかりされたんじゃ、面白くない訳で

ルイズの洗濯物を洗いに行った

小説では、ここでシエスタが出てくる筈なんだが  
そう思っている矢先

「あら、ミス・ヴァリエールの使い魔さんじゃないですか」

そこにはシエスタと思われる人がいた

「あなたは、シエスタ様ですか?」

シエスタと思われる人は、当然驚く

「え?! どうして私の名前を?」

小説で読んだから、なんて言えないので

「この学園に、美人なメイドさんがいると聞いたから」と言った

「っ!? そんなことはありません…貴方のことも、この学院じゃうわさになってますよ」

俺が噂に?

「どうして?」

「ミス・ヴァリエールが、とんでもない美男子を召喚した、と噂ですよ。噂に違わずかつこいいですね」

なんだ、そんなこと

嫌だな、そんな噂

「洗濯したいんだけど、洗濯する場所はどこ?」

話を反らすように聞いた

「それならこちらです」

シエスタのあとをついていった

「私も手伝いましょうか?」

「いいよ、ありがとうシエスタ」

そう言つて、シエスタを追い返した

一緒にいたら、何か大変そうだったから

サイトも大変だったろうな

よく分かる

洗濯をしている最中に思い出した

マルトーさんと仲良くなつて、風呂作らないとな

洗濯を終えると、すぐに部屋に戻った

もう一つ、大切なことを思い出したから

「なあルイズ!」

「えっ! はっ! ひゃ?! な、何?!」

そんなに驚くことないだろう

もう一つ大切なこととは武器のことだ

確か、もうすぐギーシュと決闘するはずだからだ

あの店の店長にボロクソ言ってるやろう

「俺、剣が欲しいんだけど、今すぐ街に行けるかな？」

デルフリンガー「どんな剣なのか楽しみだ

「も、もももも勿論よ！さあ、準備しましょ」

あれ！？

意外とアツサリだな

まあ、別にいいか

楽しみだな、デルフリンガー

「ねえ、今の聞いた？」

正反対な二人が話を盗み聞きしていた

「……………聞いた」

「ふん！ヴァリエールったら餌で釣ろうって魂胆ね！」

「……………許せない」

「あら、あなたがそんなこと言うなんて珍しいわね。それじゃ、あなたの風竜飛ばしてくれない？」

「……………分かった」

## 相棒との出会い

俺とルイズは馬で街まで向かった

うわ、結構揺れるな

怖ええええ！

落ちるうう！

サイト、よくこんな馬に乗ってたな

素晴らしいよ

こりゃあ着く頃には、身体中が痛くなってると思うな

ダメだこりゃ

なんでルイズはあんなに乗馬うまいんだ？

小説で確かに乗馬が得意って知ってたけど

これほど上手いとは

「なあルイズ。ルイズはなんでそんなに乗馬がうまいんだ？」

「それは……………」

馬の上で会話をしている二人を上空で眺めている二人がいた

「なによ！ルイズつたら！あの最高にかっこいい使い魔と楽しそう

にして！悔しいい！」

「……………いけすかない」

「ほんとと。私もあんな使い魔がよかつたわあ」

「……………私も」

「え？！タバサも？」

「……………何となく、父様に似ているから」

「そう。はあ、羨ましいわね、ルイズつたらあんなに幸せそうな顔  
しちゃって」

「……………武器屋に先回り」

「そうしましょ」

二人を乗せた風竜は、街へ先回りした

「ああ、腰いてえ。それにしてもすごいなルイズは」  
サイトの気持ちがよく分かった

これは酷い

上下運動が激しくて、途中吐きそうになった

「な、何が？」

話す時はもっとリラックスしてくれよ

こっちまで話しにくくなるじゃん

「よく街まで休憩なしで行けるなあと思って」

大通り…といっても狭いので、馬を降りて武器屋に向かっている最中だ

「私は慣れているから大丈夫よ。それより、エイジは大丈夫？途中吐きそうになってたけど」

吐きそうなのは何とか大丈夫だけど

「腰いてえ」

年取ったみたいで情けなかった

暫く歩くと、剣と盾の看板の店があった

何か胡散臭いな

「ねえ、この店で一番良い武器出してくれないかしら？」

中から聞き覚えのある声が聞こえた

まさか？

「わたしじゃなくて…あ、ダーリン！貴方のために武器買ってあげるわ。どれか好きな剣選んでよろしくてよ」

やはりキュルケか

それにタバサ

この二人は本当に仲良いな

「キュルケ、それにタバサ！なんでここに？」

小説では、サイト達が帰った後にくるはずなんだけど

先回りされてたなんて

「決まってるじゃない。お金のないあなたに変わって、エイジにプ

レゼントするんじゃない。ほらダーリン。好きなを選んで  
すると、店の奥から店長がやって来た  
金ピカのあのすぐに使えなくなる剣だ

「これなんかいかがでしょう？かの有名なゲルマニアの……」  
おっと！

ボロクソ言っただったね

「ゲルマニアの「そんな剣で何が出来るんだ？オッサン」「  
皆がはあ？と言う顔で俺を見て来た

「そんな剣、ただの飾りに過ぎない。宝石で人を斬るって言いたい  
のか？馬鹿なのか？こんな飾り物で儲けようってか？なあ？デルフ  
リンガー」

今度は店長が変な顔で俺を見て来た

まあ、そうだろうな

「ハハツ、ざまーねーな、おっさん。それとあんた、どうして俺っ  
ちのことが分かったんだ？」

オンボロの剣が喋っている

おお、素晴らしい

「やい！デル公！お客様に失礼だろうが！」  
本当に喋っている

なんともフアンタジー

「すぐに分かるさ」

俺はデルフに手を触れた

手を触れるとルーンが輝き出した

「……こりやおでれーた。おめえ、使い手か？」  
うん

俺もちゃんとガンダールヴだな

「ああ、ルイズ！この剣が欲しいんだけど！」

「ええ！だって、錆びだらけじゃない！もつと良い武器でもいいの  
よ？」

「これが良いんだ。この店では、これが一番じゃないか？」

「エ、エイジがそこまで言うなら……おいくら？」

店長は面食らったように

「へ、へえ。100エキューでさあー。しかし、こんな武器で良いんですか？」

「いいのよ。本当はもつと立派な武器でも良いんだけど、エイジが欲しいって言うから……はい、100エキュー」

キュルケが武器を買ってくれと言ったが断った

そして、タバサ

そんなにくつつくのはやめてくれ

「はいエイジ……って、なに私の使い魔にくつついてるのよ！タバサ！」

ほら、頼むから離れてくれよ

ルイズの目が怖いから

な？頼むよ

「いいじゃない。薔薇はたくさんの人を楽しませるんですよ。いつもギーシュが言ってるじゃない」

とキュルケ

ギーシュ？

ああ、決闘するやつの名前か

てかタバサ！

さつきよりもくつつくのはやめてくれ

ルイズから殺気が漂ってくる

「き、貴族様！ここは店の中です。どうぞ、あとは外でよろしくお願ひします」

「私の言うことが分からないの？！タバサ、エイジから離れなさい！」

あー、店長無視されたねー

しかし、タバサって初めからこんなにサイトに積極的だったっけ？

「……………いや」

「どっつして?!」

「お客様！落ち着きください！後生です！後生ですう！！」  
店長が可哀想

それを笑って見ているキュルケ  
そして、一番気まずい俺

「と、とにかく、外出しよう、な？」

俺の言葉で、やっと外に出ることができた

タバサがくつついていていけど

「はいエイジ。その剣の切れ味、タバサで試してみたら？」  
な？！

なんて事を言うのだね！

ルイズさん怖いよ

本当に怖いよ

しかし、言って良いことと悪い事くらい考えてくれよ

俺を殺人犯にさせるつもりか？

俺は剣を受け取った

だから、タバサ離れてくれないかなあ

「歩みにくいからさ、ちよっと離れてくれないかな、タバサ」

「……………いや」

へ？

何で？

「……………父様」

と、父様？！

あ、タバサの父様って、シャルルって人で、確か兄のジョゼフに暗  
殺されたんだよな

って、何で俺が父様？！

「この子の父様に、あなたがそっくりなんですって」  
とキュルケ

「タバサ！エイジを父様呼ばわりしないで！エイジは私の使い魔な  
んだから！」

とルイズ

ああ、居心地悪い  
早く帰りたいよ

あ、地球じゃなくて、学院にな  
地球なんか、飽きてしまった

「用事は済んだことだし、早く学院に帰ろう」  
俺は促したために、あとで地獄になる事になる

ルイズとタバサの喧嘩を横で楽しそうに見守っているキュルケ  
止めてくれよ！

居心地悪い

「あ、そうだ。ねえタバサ、ダーリンを風竜に乗せてかえってあげ  
たら」

おいおい、そんな事言ってくれるな  
でも、風竜かあ

乗ってみたいな  
「……………乗せてあげる」

「えっ、マジで！」  
タバサはこくりと頷く

「じゃあ、乗せてもらおうかな」  
そう言った瞬間、ルイズが抱きついてきた

「お、おいルイズ。街中だぞ?!」  
「いやよ、エイジとタバサと一緒に帰るなんて。エイジは私の使い

魔なの！私と一緒に帰って！」  
ああ、メンドウクサイナ

だからな、抱きつくのやめてくれ  
こりゃあルイズと帰ったほうがよさそうだな

風竜は諦めよう

「この通りなんだ。ゴメンなタバサ、また今度乗せてくれな」  
と言うと、ルイズは嬉しそうな顔をした

でも、タバサは悲しそうな顔をした  
俺、こういうの苦手なんだよ

「……………分かった」

おい、無言の時間長くないか？

「本当にゴメンなタバサ」

早く行こ、とルイズに引つ張られながら、タバサに言った  
誰かを悲しませるの、嫌いなんだよ

「なあ、ルイズとタバサは仲悪いのか？」

揺れる馬の上から話しかけた

「別に悪くないわよ」

とルイズは言うが、傍から見れば、めっちゃ仲悪いぞ！

「本当か？」

「本当よ」

「じゃあ、さっきなんで喧嘩してたんだよ？」

「だって、タバサがエイジを取ろうとしてたんだもん。それに、父  
様呼ばわりなんて許さない」

ああ、いろいろメンドウクサイナ

『相棒、なかなかお疲れのようだな』

デルフが喋りかけてきた

「ああ、結構大変だ。ああやって喧嘩するのを見ると疲れるんだよ」  
学院までの道を馬に揺られながら帰った

## 諸君、決闘だ

学院に帰ってきた時、俺の背中では悲鳴をあげていた  
本当にキツイぞこれ！

真面目にヤバイっす！

戦国武将とか大丈夫だったのかな

とかバカなこと考えていると、

「ギーシュ様：私だけと仰っていたのに……！」

「やっぱり一年生に手を出していたのね、ギーシュ！」

怒鳴り声が聞こえた

なんだなんだ？

皆が集まっているところに駆け寄った

何か喧嘩らしいけど

その辺にいた女子生徒に話を聞いてみる

「なあ、何があったんだ？人だからで良く見えないんだけど……」

「まあ、エイジ様あ。：ギーシュが二股かけていることがバレて人

文受けているのよ」

「ふうん」

あれ？

確かこの時サイトが香水を拾って……

俺のいない間に、なんでこんな事に？

「嘘つき！」「」

パシィッ！！！！

といい音がした

さぞ痛い事だろう

でも、どうやって二股がばれたんだろう……

「おい！そのメイド！」

そのメイド？

まさか、シエスタが？

「は、はい…何でしょう…」

「君が落ちた香水を拾ったからこうなったんだ！二人の麗人が機嫌を…「もともと、お前が悪いんだろ？」

突然割り込んできて、周りがしらける

いいもん、気にしないもん

「き、君、美しい……………じゃなくて、何なんだね？」

「だから、お前が二股かけていることが悪いんだろって言ったんだけど、貴族様って頭悪いのか？」

「き、貴様！貴族を侮辱するか！」

「別に貴族を侮辱しない。今はお前自身を侮辱している。全体を取り囲んで自分は逃れる気か？」

「フフ、貴様、貴族に対する礼儀を知らないようだね！」

「貴族に対する礼儀はわかまえている。でも、お前は貴族の資格がない。生きている価値のない奴だ」

あ、言い過ぎたかな？

別にいいか

どうせギーシュだし

「ふん。では、貴様に貴族がなになるかを見せてやる。ヴィエトリの広場で決勝だ！逃げたければ今のうちに逃げたらいい」

「逃げたいのはお前だろ？ほら、足が震えているぞ」

ふん！と言ってギーシュは行ってしまった

言い過ぎたかな

あの位が妥当か

あ、でも決闘ってやった事ないしな

口喧嘩もした事ないし

まずいかなあー

「エイジ！」

不意にルイズの声がした

「ん？どうしたルイズ」

「決闘だなんて…ちよつと来て！ギーシュに謝ってもらいに行くか

ら

へ？

俺が謝るんじゃない？

小説では、

『ギーシュに謝りなさい。今なら許してもらえるかもしれないから  
だったような気がするんだが

まあ、今後の事もあるし、決闘はした方がいいよな

「相手がどうしてもって言うているんだ。逃げたらいけないだろ」

「だけど、エイジが怪我するの見たくないわよ」

「大丈夫。俺は勝つ、絶対に。デルフの切れ味を試してみたかった  
んだ」

そう言つて、ギーシュのあとを追つた

「ねえタバサ、どっちが勝つと思う？」

「……………知らない」

「じゃあ、エイジが負けそうになったら？」

「……………助ける」

「ふうん。じゃあギーシュが負けそうになったら？」

「……………放置」

「分かったわ。ダーリン、大丈夫かしら？」

「……………平気。彼はガンダ……………」

「ガンダ…何？」

「……………何でもない」

「諸君、決闘だ！」

ヴィエトリの広場で決闘が始まった

「逃げずにここに来た事は褒めてやる」

「別に。お前に褒めてもらいたくないし、褒めてもらったところで  
反吐が出るから」

俺、ギーシュに怨でもあつたっけ？

つー位、悪口言ってるな

「そうかい。では、ワルキューレにやられる！」

ギーシュが杖を振ると、ゴーレムが現れた  
スゲー

こんな事できるんだ

スゲーファンタジーダー

おっと、そんな事考えている暇無かった

ゴーレムの腕がとんでくる

だが、遅い！

俺はそれを難なく避け、蹴りを入れた

すると、意外な程に脆く、粉々になってしまった

「きゃあああ、凄いわエイジ！」

「イケイケエイジ！」

「かつこいいわよー、いけー」

など、さまざまな声援が飛び交う

ああ、やりにくい

「く、なかなかやるようだな…だが、これならどうだ！」

ギーシュは5体ゴーレムを出した

これはちよつと厄介だな

さて、どうしよう

一体を相手すると、残りが攻撃してくるからな

デルフを使って何とかなるかも

俺はデルフを抜いた

「いくぜデルフ！」

『おう、相棒』

その時、体に何かみなぎるような感じがした

そして、何でもできそうな気がした

そして、俺から何かが飛んで弾けた

次の瞬間、時間が止まった

誰一人動いているものはいない

動いているのは、エイジ一人だけ

どうなってんだ？

どうなってんだ？！

どうなってんだ？！！

どうなってんだ？！！！！

全てがピタツと止まっている

ギーシュも、ワルキューレも、野次馬も、何もかも

何故だ？！

そんな事、サイトにはできない筈

どうして？

面白い程、ピタツと止まっている

そうだ！

この際、ワルキューレを全部破壊して、ギーシュの杖を取ろう

最も卑怯な作戦だ

因みに、デルフも喋れない（はず。ただ話してないだけだけど）

ワルキューレを全部破壊して、ギーシュの杖を奪った

これでよしと

でも、どうやって戻ら戻るんだ？！

もしこのままだったら…

少しすると、弾けたものが、俺の中に戻って行く感じがした

そして、世界はまた動き出す

「っ！？何なんだこれは？！」

当然皆は何が起きたかわからない筈

でも、こんな事で世界が矛盾して歪みが発生するとか何とか、

眼

の何とかであったような

いや、ここは紅世ではない

ゼロの使い魔の世界だ

「驚いたかギーシュ」

「な、何をした…ワルキューレが全滅しているじゃないか」

「俺は超能力が使えるんでね」

その言葉に、野次馬どもが反応する

「超能力つて、まさかエルフか?!」

「先住魔法か?」

俺にも分かんね

エルフではないがな

「で、ギーシユ、まだやるか?お前、杖はどうした?」

「つ、杖?!はっ!杖はどこだ!」

俺がさつき取ったんだよーん

やーい、バーカ

「お前の杖ならここにあるけど、折ってもいいかな?負けを認めるなら今がチャンスだけど」

「ん、むう…ま、参った」

すると、野次馬どもが、わあ!と反応した

俺は少し笑ってみる

野次馬を掻き分けて外に出ると、誰かが後ろから走ってきた

桃色の長髪が美しいルイズだった

「エ、エイジ…怪我はない?」

実際、怪我とか全くないな

相手は動いて無かったんだしな

しかし、あの力は何だったんたろう

「俺は大丈夫。それより、あいつを心配した方がよさそうだ」

余韻にたなびく桃色の長髪が美しい

「……………エイジ…ありがとう」

「えっ?なにが?」

「……………いろいろとよ」

いろいろ、ねえ

ところで、小説とまったく違うんだが

ルイズの設定、どっかで間違ってるないか?

『相棒、いろいろよろしくな』

背中が出るからが話しかけてきた

「ああ、こちらこそ」

俺は一人と一振りに向かって言った  
ところで、あまりデルフ使わなかったな  
いろいろ試したかったんだが

## 土塊快進撃

「ダーリン凄いわ!」

「…………… 妙技」

二人の女生徒がよって来た

この女生徒達は、エイジが負けると思っていたのだが…  
妙な技を使って勝ってしまったのだ

「別に…たいした事じゃないよ」

いや、たいした事である

何しろ、自分にあんな能力があるとは知らなかった

これは一大事だ

まてよ……

あれは本当に俺の出した技なのか?

まあ、俺しか動けなかったから、俺が出したんだらうけど

小説では、こんな技なかった筈なんだけどなあ

「ここは居心地悪いから、部屋に戻ろう、な?」

普通に部屋に戻ろうとすると人が多いので、大回りで帰る事にした

ここなら人はいない

俺、ルイズ、キュルケ、タバサの四人で部屋に戻る

日本の学校と違って面白いな

など考えて施設を見ていた

お、あの塔は破壊の杖が保管されている塔だ

フーケに破壊されるんだったよな

いや、実際はルイズが破壊するんだっけ?

そう思う刹那

バゴゴゴゴゴ!!!!!!

というBとGの爆音が聞こえた

「な、何だ!?!」

「……何?!」「……」

俺と三人の声が重なった

振り返ると、そこには……………

嘘だろ……

登場早すぎだろ……

原作無視か！をい！！！！

「一旦隠れる！」

四人はすぐ近くにあつた茂みで様子を見ていた  
間違いなく、フーケとゴーレムだった

30マイルはあるかと思われるゴーレム

「ちよつと何よあれ！」

キュルケは思わず叫んでしまった

「おやおや、そんな所に隠れて何してるんだろっね？まあいい、消えてもらっよう！」

フーケに存在がばれてしまった

まずい……

と思っていると、茂みからルイズが出た

「何やってんだルイズ！」

ルイズが勝てる筈がない

何やってんだまったく！

ルイズがなにやら魔法を詠唱する

詠唱が終わった

杖を振ると、やはり爆発がおこった

「逃げるルイズ！死にたいのか！」

「いやよ！ここで逃げたら、ゼロってバカにされるじゃない！」

そう思っていると、ピシリツと塔にヒビが入った

「おや、ありがたい事してるれるねえ」

フーケはそう言うと、ゴーレムで塔を殴った

ドゴーレム……！！！！！！

凄まじい音と同時に、塔が破壊された

フーケはゴーレム伝いで塔に渡り、

《破壊の杖、確かに頂きました。土塊のフーケ》  
と書き残し、破壊の杖を盗んで帰って行った

呆然と立ち尽くしているルイズ  
「ルイズ！怪我はないか！？」

ただ立ち尽くしているルイズ  
そして、口を開いた

「私…本当に駄目なメイジね…いつもゼロって呼ばれて…だから、今日は頑張ろうとしたのに……！」  
ルイズが、泣いている

俺、こういうの本当に苦手なんだ

「ルイズは私と違って、ゴレムに向かっていったじゃない。何もゼロなどこなんてないわ。むしろ、私の方がゼロよ」

キュルケが慰めるが、ルイズは地面に泣き崩れている

俺はこんな時どうしたらいいんだ……

俺はこんな時、いつも無力だ……

泣き崩れているルイズを、三人はただ見つめる事しかできなかった

「何事で………はっ！こ、これは一大事ですぞ！」

頭の寂しいコルベールが走ってきた

続いて、他の教師がやって来た

「こ、これは………」

そして、俺たちは学院長室に連れてこられた

「君たちは、フーケを見たという事じゃな？」

学院長の言葉に、俺たちは、はいと答えた

「そういえば、ミス・ロングビルがおらんのか？」

ミス・ロングビルと聞いた時、俺は反応してしまった

「オスマン学院長！ミス・ロングビルが………」

続きを言おうとしたら、部屋をノックする者がいた

「誰じゃ？」

「ロングビルです」

「うむ。入りたまえ」

ミス・ロングビル：「フーケが学院長室に入ってきた」

「ええっと、何か言うたかの？」

「ここで言ったらまずいな」

「いえ。何でもありません」

と言った

ここで言ったら、破壊の杖を取り返すのが少し面倒臭くなる

「ミス・ロングビル。今までどこにいたのじゃ？」

「はい。フーケの情報を集めてまいりました」

お前自身を調べたのか

おかしな奴だ

「して、結果は」

「調査しましたところ、フーケらしき人物を見かけたと言う情報がありました」

「でかした！で、その…」

「学院長！王室に報告しましょう！兵隊を差し向けてもらわねば！」  
「コルベールの言葉に学院長、オスマンは目をひん剥いて」

「ばかもの、王室なんぞに知らせている間にフーケは逃げてしまおうわ！第一、身にかかる火の粉も払えんで何が貴族じゃ！魔法学院の宝が盗まれた以上、これは魔法学院の問題じゃ！ 無論、我らで解決する！」

と怒鳴った

この迫力には、そこにいた全員（タバサ以外）飛び上がった  
凄まじい迫力だ！

「フーケを我が手で捉えようと思う者は杖を掲げよ！」

しかし、教師達は誰も挙げない

「ん？どうした？フーケを捉え、我が名をあげようとする貴族はおらんのか！」

しかし、やはり誰も拳げない  
いや、一人だけ拳げた

「私がいけます！」

なんとルイズ！

やってしまった…

それに釣られるように

「私も行かせてもらいますわ」

「……………心配」

とキュルケとタバサ

うん

ここは小説と同じだな

「この三人に勝てるという者は前へ出よ！」

誰も前には出なかった

なんか、小説よりも省略されている気が…

確かここで生徒の説明があつて…

ま、いいか

「では、三人の健闘に期待する」

「……………杖にかけて！」

俺は三人には含まれなかったが、

「剣にかけて！」

と言っておいた

言わないよりはマシだろう

馬車の中では俺は無言を通した

フリーケと同じ馬車に乗っているのだ

いい気はしない

目的地までは一時間で着いた

「情報によれば、あの小屋の中ですわ」

あの小屋、ねえ

「俺が見てくる。皆はここで待機しておいてくれ」

と言って、小屋の中を覗いた

勿論、誰もいない

「誰もいないぞ！」

俺が言くと、皆はほっと息を着いた

フーケが見回りに行くのを止めたらどうなるんだろうか  
やってみよう

「私は周りのみまわりに「俺が行くから良いですよ」「

フーケは頭に？を浮かべたような顔をした

「どうしたの？エイジ」

ルイズが聞いてきた

「こうしよう。俺が外の見回り。ルイズが小屋の周りを見張る。残りの三人が小屋を調べてくれ」

今度は皆が？を頭に浮かべた

そして、

「危ないですから、私が行きますわ」

とフーケは走って行った

なんと、止めようとしても強引に行くのか…

面倒臭いことになった

まあ、ロケランの使い方を見せて、使えなくなったロケランを使わせればいいか

渋々小屋を調べた

うわ、埃っぽいな

さて、どこにあるのかな？

狭いし、すぐに見つかるだろう

しかし、なかなか見つからない

「おーい、あつたか？」

二人に聞いても無いと言う

おかしい……

何かおかしい……

その時

「きやややややああああ！」

外からルイズの悲鳴が聞こえた

嘘だろ！

見つかってないぞ！

バーバーン！

屋根が吹き飛んでゴーレムが出てきた

嘘だろ嘘だろ嘘だろ嘘だろ嘘だろ嘘だろ！

どうやって戦えっというんだよ！

ロケランが無いと話にならねえ

「まずい事になったじゃない！」

「……………退却！」

俺達は、急いで小屋から出た

出た瞬間、俺の頭が吹き飛んだ

いや、本当の意味じゃなくて…

揶揄的にな

なんと！ルイズが勇敢にもゴーレムに立ち向かっているじゃないか！

勝てる訳ねえだろ！

「ルイズ！一旦戻れ！」

しかし、ルイズは杖をゴーレムに向けている

「いやよ！今度は絶対やって見せるんだから！」

杖から魔法が放たれる

しかし、当たったところでゴーレムが少し削れるだけ

すぐに元通りになるから意味がない

ゴーレムが足を振り上げルイズを踏み潰そうとした

ルイズは、腰が抜けて動けない！

くそ！まずい！

デルフを握ると、ルーンが強く輝いた

体が羽のように軽い

サイトと同じだ

とんでもないスピードでルイズを抱きかかえ、攻撃を避けた

タバサが口笛でシルフィードを呼んだ

「ちよつと！なんで助けるのよ！」

とルイズ

「お前が死んでしまうのが悲しくてな……」

と言うと、ルイズは黙ってしまった

「タバサ！ルイズを頼む！」

そう言つて、ルイズをタバサに引き渡した

シルフィードが上空へ飛ぶ

と、気付かない内に、ゴーレムの拳が横殴りに俺を吹き飛ばした

「っ！！ぐわ！」

20mはぶつ飛んだだろうか

「エイジ！エイジイイ！」

ルイズの声がした

大丈夫

まだいけるさ

幸い、当りどころが良かったのか、骨は折れてない

でも、体中が痛い

ルーンのかか

この程度で良かった

「このでかぶつ！調子に乗りやがって！」

ゴーレムに向かってデルフを振り下ろした

ズシャリ！

と、砂山をスコップで衝いたような、嫌な感覚が残った

ゴーレムの片腕が落ちる

しかし、すぐに再生されてしまった

「くそ！これじゃ負けもしないが勝てもしない。デルフ！勝算はあ

るか？」

『分からねえな。一瞬で壊せたら、勝てると思つがな』

そうか、あの時の超能力

時間を止めれば良い！

…でも、どうやって？

あの時は、どうやって時間を止めたんだ？

また、ゴーレムの重いパンチが振ってくる

時間よ止まれ！

時間よ止まれ！

時間よ止まれ！

時間よ止まれ！

止まらない

くそ！

ゴーレムのパンチが目の前に迫っている

俺は横に飛び、拳を避けた

さっき殴られて体がフラつく

二つ目の拳が俺を吹き飛ばす

「がは！っ！うぐう…くつそ！」

ふっ、と何かが吹き飛んだ

何もかもどうでもよくなった

そして、

「殺す…殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す！」

と呪いのように頭の中に流れた

「エイジ！もうやめてえ！帰ってきて！」

ルイズの声もどうでもいい

親などどうでもいい

殺人など…どうでもいい！！！！

『あ、相棒…どうしたんだ？』

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す！」

「ねえ、エイジどうしちゃったのかしら？何か呟いている様だけど」

「……………危険」

シルフィードは、エイジを連れて帰ろうとした

エイジの近くによると

「来るな！」

とデルフが振られた

振ったあとに竜巻が発生した

シルフィードは辛くも避ける

あんなエイジ：みた事ない！

まるで、何かに乗っ取られている様な眼

どうしちやっただのエイジ？

『へへへへ、いい気分だぜ！誰かを殺すってのはよ！』

エイジの声が多重音声のようにひびいた

ゴーレムにデルフを向け、笑っている

エイジは遙か上空へ飛び上がった

「何よあれ！どんな力なの？」

「……………分からない」

空中で何かを蹴るように跳ね返り、ゴーレムの方へと凄まじい勢いで突進して行く

体中に焔を纏い、ドリルのように回転しながら

まるで、弾丸のようだ

ゴーレム一直線に降りて行き、頭から足までを貫いた

ゴーレムがバラバラに割れた

『いい気分だぜ……まったく……』

エイジは地面に倒れた

というより気を失った

三人がシルフィードから降りて来る

「エイジ！エイジ！大丈夫！死んじやいや！」

ん？何だ？

ルイズの声か？

「どうしたんだ？ルイズ？」

何故ルイズは泣いている？

はっ！

ゴーレムは？

「ゴーレムは？」

と言った瞬間、皆がはあ？というような顔で見てきた  
いや、本当にどうしたよ？

「ゴーレムなら、エイジが倒したじゃない！」  
え？

俺が倒した？

覚えてないんだけど…

「倒したって、殴られてそれから、覚えてないけど…」

「？まあ、良いじゃないルイズ。無事なんだから」

「そうね。それにしても凄かったわエイジ」

「……………神の技」

ふうん

俺、凄かったんだな

覚えてないけど

でも、なんか引つかるような

別にいいか……………

良くねえ！

「俺達、目的はゴーレム破壊じゃないぞ！」

そうだ！目的は破壊の杖の奪還

その時、

「おやおや、まさか破壊の杖無しで勝てるとは思わなかったよ  
と声がした

無論、フーケだ

そして、手には破壊の杖があった

「ミス・ロングビル？どうしてそれを？」

「ルイズ気付かなかったのか？こいつがフーケだからだよ！」

俺は怒りで壊れてしまっそうだ

「ふん。破壊の杖なんか小屋のところにおいとくと、いつ取られる  
かわかったもんじゃないからねえ」

とフーケ

初めから持っていたという訳か  
でも、使い方がわからない筈

「その使い魔君。使い方がわからない筈とでも思っているのかい？  
生憎、使い方はマスターしているんだよ」

ロケランをセツトして俺達に向けてきた  
くっそ！

かなりやばい！

と思っただが、暫くすると思わず笑えてきた

「ねえ、エイジ。これ、何なの？」

ルイズの間抜けな質問に力が抜けた

「知らないのか？まあ、知らなくて当然だよな。これはな、これから  
発射された弾が物に当たると大爆発するんだ」

と説明すると、三人は

「くっそ！」「くっそ！」

と言った

俺がデルフを抜こうとした

「動かないで！」

フーケは俺にロケランを向けてきた

小説では、M72 LAWだったような気がするんだが、これはA

T-4だな

別にいいや、そんなこと

しかし、動かないでって言うけど、動かないでも撃つんだよなこの人  
いや、撃とうとするだけか

どうせ撃てない

「どうした？さっさと撃てよ、年間のおばさん」

「な！私はまだ23よ！」

カチッ

三人は目を閉じていた

俺は笑っていた

「何？どうということよー！」

フーケは焦ってもたついている

その隙を見計らって、デルフの柄で、フーケの鳩尾を殴った

「グーハッ！」

フーケは薄れゆく意識の中、エイジの声を聞いた

「バカだなあ。引き金弾くの忘れたんじゃなあ」

そ、そうか…

引き金弾くの忘れていた…

フーケは地面に倒れた

三人はまだ目を閉じていた

「おい、いつまで目を閉じているんだ？」

三人はやつと目を開けた

そこには、フーケが倒れていて、エイジが笑っていた

「もう安心だ。さあ、学院に戻ろう」

あ、これ元には戻せないよな

俺は落ちていたAT-4を拾った

初めて持つな、こんな物

「因みにな、これはこんな威力があるんだ」

と言って、俺は少し離れた岩目がけてロケットを放った

反動あるかと思っただけど、そういえば無反動砲だよなこれ

岩に命中し、粉々になってしまった

三人は啞然としていた

「ふむ……、ミス・ロングビルが土塊のフーケじゃったとはな……。美人だったもので、何の疑いもせず秘書に採用してしまったんじや」

とオスマン

大丈夫か？本当に

サイトと同じ気持ちだろう

コルベールが呆れたように尋ねる

「一体どこで採用されたのですか？」

その答えにオスマンは

「街の居酒屋じゃよ。私は客で、彼女は給仕をしておったのじゃが、  
ついついこの手がお尻を撫でてしまつてな」

こんなんがトップで、大丈夫なのかこの学院。

とりあえず、エロジジイで呼び方決定していいよな？

「で？」

どうでもよさそうな声でキュルケが促した。

「おほん。それでも怒らなかつたので、つい秘書にならないかと、  
誘つてしまつての」

駄目だこいつ。早く何とかしないと。

思わず何処ぞの新世界の神みたいな思考になつた。

タバサも珍しいことに半眼になつて、心底理解できないといった感  
じの口調になつて呟く。

「なんで？」

瞬間、オスマンが目を剥いて怒鳴つた。

「カア　ッ！」

剣幕は凄まじかつた。

だが、先ほどまでの自白の所為せいで威厳は皆無だつた。

それからこほりと一つ空咳をし、真顔になつて言う。

「おまけに魔法も使えるというもんでな」

「死んだ方がいいのでは？」

ぼそり、と隣に控えたコルベール先生が呟いた。

うん、俺もそう思った。

ルイズやキュルケ、タバサもうんうんと頷いている。

まあ、無事に破壊の杖も戻つたし、めでたしめでたし

## トリスティンの可憐な花

ルイズは夢を見た…

「ルイズ！ルイズ！まだ説教は終わってませんよ！」

お母様の怒鳴り声を背中中で受けながら、私はある場所へ向かった  
誰も来ない、静かで、私だけの特等席

怖いお母様、意地悪なエレオノール姉様から逃げられる場所

私は走って小舟へ向かった

昔は家族皆で小舟で楽しんでいた

しかし、今はお父様は近隣の貴族との付き合いで忙しかったり、軍  
事の事で忙しかったりと、暇がないのである

お姉様達は、ヴァリエールの息女らしく、魔法の才能に満ち溢れて  
いた

今は魔法を覚えることが大変なのである

だから、ここには誰も来ない

湖に浮いている小舟へ乗り込み、予め用意していた毛布に包まった  
私だって分かってる

私だって、ヴァリエールの息女らしく、魔法が使えないといけない  
でも、どうして私はできないのよ……

「泣いているのかい？ルイズ」

不意に声をかけられて驚いた

その人物が誰なのか調べてみる

「……………子爵様？」

しかし、返事がなかった

一体誰？

小舟からゆっくりと体を起こす

「やっと起きたか、ルイズ」

そこにいたのは、エイジだった

「どうしてここにエイジが居るの？」

「俺はルイズの使い魔だから、かな？」

エイジはそう言うと、手を差し伸べてきた

私はその手を握り、小舟から降りた

「またお母様に叱られたのか？まあ、ルイズの事は俺から何とかするよ。さあ、行こう。美しいルイズ」

美しいルイズ…

エイジが、美しいって言うてくれた

「エ、エイジ…あなた、私の使い魔なのよね？だったら…」

いい終わる前に、エイジが私の唇に唇を合わせてきた

ほんの少しだけの間

本当に少しだけ…

「ん、ぐ…ちよっと！短すぎでしょ！」

今度は私の方から顔を寄せた

もう一度、唇が重なる

しかし、その瞬間

ピチャ、とも又チャ、ともスチャ、ともペチャ、とも言えない、何

とも甘い感じが唇に伝わった

何！？

私は目が覚めた

目の前にはエイジが寝ている

どうやら、本当にエイジとキスをしてしまったようだ

やだ、恥ずかしい

でも、嬉しい

エイジは寝てるし、もう一回位良いわよね？

再び、唇を合わせようとした

すると、「寝首を掻こうたあ、いい度胸じゃねえか！」

バツ！とエイジが体を起こした

どうやら寝言だったらしいが…

今度は私がエイジに押さえつけられてキスをされている状況になった

エイジは寝ぼけているのか、ぼーっとしているが、次の瞬間

「はっ！ル、ルイズ！何をして、あ、ご、ごめん…」  
と言ってきた

何で？

何で謝るのよ？

しかもこんな状況で

バツとエイジは反対側に倒れ、私の唇から遠ざかった  
もう少し、もう少しだけしたかったのに！

「ちよつと！もう少しだけ…じゃなくて、初めに言っただでしょ！べ、べべべべ別にエイジにキスされても動揺しないって！だから！…  
もう少しだけいいでしょ！」

また、私がエイジを押し倒す状況になった

「ル、ルイズさん？」

「エイジは私の使い魔！だから、私が何したっていいでしょ！」  
そう言っただけでエイジを黙らせ、再びあの甘い感覚に触れようとした  
ガチャ！

「ミス・ヴァリエール。もう朝ですよ？いつまで、って！はっ！は  
わわわっ！！！」

なんでノックもしないのよこのメイド！

凄く嫌なシーンを見られたじゃない！

「ち、違っただシエスタ！これには訳が…」

私はエイジの言葉にムツとした

何が違うの？

何が違うのよ！

「何が違うっていうの？エイジ！」

そう言っただけでエイジに抱きついた

「な、何するんだルイズ！」

「分かったでしょ！分かったならさっさと部屋から出て頂戴、変態  
メイド！」

私がそう言つと、メイドはムーンウォークで部屋を出て行った器用なメイドね  
ところで、エイジは何で気絶してるのよ?!  
ちよつとムツとした

午後の授業は風の教室で、ギトーの授業が行われていた

俺はいつの間にかここにいた

というのも、朝最悪な目覚めをしたからだ

いや、最悪じゃないな

最高だ!

ウエルカムだ!

もつと来い!だ

だが、起きるなりルイズとキスするなんて、本当に驚くぞ!

殺されるかと思つたし

サイトなら確実に殺されていたな

いや、サイトでも殺されてなかったかも

それはいいとして、そこでシエスタが入って来るなんて

運が悪すぎる

俺の意識は、多分そこから無い

ぼーっとしていると、いつの間にか昼になり、いつの間にか厨房でシチューを食べさせてもらい、いつの間にかここに來ていたという訳だ

やっと自分の意識が戻つて來た頃だ

「諸君、私が前回風が最強の系統である所以を教えた事は覚えているな!」

「ええ、勿論ですわ!私の炎を難なく吹き飛ばしましたわね!」

ギトーにキュルケが嫌味っぽくいうのに、それにギトーは気付かず話を続ける

「そつだ。風の前には炎、水、土も存在する事はできん。風は、全てを薙ぎ飛ばす」

魔法の授業って面白いよな

日本でも、こんな授業があったらなあ

まず、地球に魔法が存在したらなあ

空想の世界だけじゃ悲しい

ハーパーのような魔法でも使えたら面白そうだな

そのためには、ホグワーツ魔法学校に行かないと

…ところで、ホグワーツ魔法学校ってどこにあるんだっけ？

まあ、どうでもいい

「これから私が諸君に風の魔法を実演する。この魔法はトライアングルクラスの力が必要になる。諸君にはまだ早い代物であるが、見せてやるう」

ほお、と俺は興味を持った

いちいち鼻に刺す言い方、とサイトは言っていたが、俺は別に気にならない

「Impreo、満たしimpreo、満たせBeorc産まれよUr力」

いよいよ詠唱が終わる、という時に、ハゲ…頭の寂しいコルベールが乱入して来た

「ミスタ？」

「失礼しますぞ！」

コルベールは何か慌てていた

そういえば、今日はアンリエッタ女王が来るんだっけ

小説ではそうなっているが

「授業中です」

ギトーは吐き捨てるように言った

だが、コルベールは無視するように

「いえ。本日の午後の授業は、すべて中止となります！」

コルベールがそう宣言した途端、教室のいたるところから歓声があった

一部、興味深くギトーの魔法を待っていた生徒以外の声である

なお、エイジは無論待つていた方だったりする

生徒じゃない方が、授業と言うヤツは面白いのかもしれない。

もかく、騒がしくなった教室を抑えるように両手を振り、後ろ手で手を組んで、コルベールは言葉を続けた

「えー、皆さんにお知らせですぞ。本日はこの学院にとって、始祖ブリミルの降臨祭に並ぶ、めでたき日であります」

コルベールが、もったいぶった調子でのけぞる

「恐れ多くも、先の陛下の忘れ形見、我がトリスティンがハルケギニアに誇る一輪の可憐な花、アンリエッタ姫殿下が、ゲルマニアご訪問よりのお帰りに、本日この魔法学院にご行幸なされます」

どよっと教室中に緊張と動揺が奔った

よく分かっていないエイジは、隣に座るルイズに何事かと尋ねている

「よって、本日は粗相があつてはなりません。急なことではありませんが、今から全力を挙げて歓迎式典の準備を行います。そのため、本日の午後の授業は中止。生徒諸君は正装し、一時間以内に門に整列するように」

生徒たちは、一斉に肯定の意を返した

その表情の多くは、緊張と興奮に包まれている

コルベールはうんうんと頷くと、念を押すように強く言った

「アンリエッタ女王陛下のおなーーーーりーーーーー!!」

正門から立派な馬車が入つて来た

俺の前に乗った馬車とは大違いだ

馬車が止まる

そして、馬車の扉が開く

おお、と皆が一斉に湧く

が、降りて来たのは、枢機卿のマザリーニだった

“鳥の骨”だ

皆が一斉にああ、とかはあ、とか言つて残念がる

しかし、マザリーニが馬車の方へ向き、手を差し伸べると、また皆

が一斉に湧きだした  
そして、今度こそ、アンリエッタ女王陛下だった  
わぁ！と一斉に湧く  
分かりやすいなこいつら、と少し笑えてくる

その日の夜

「なあ、ルイズと女王陛下って幼なじみだよな？」  
一応聞いてみる

もし違ったら、あの手紙の件は無くなるからだ

「お、幼なじみなんて…私は小さい時に、姫様のお遊び相手を勤め  
させてもらっていたの。小さい時から知っているわ。…でも、どう  
してそれを知ってるの？」

手紙のイベントはどうやら発生するみたいだ

ワールドが問題だな

そして、ウエールズ皇太子も問題だな

さあ、どうすべえ

「あ、いや、特には無いけど」

そんな話をしていると、

トントン

とノックがあつた

こりゃあ多分姫様だな

と思い、扉を開けた

瞬間に勢い良くフードを被った女性（体付きからして。俺はサイト  
みたいにいやらしい目は向けないけど）が入って来た

「お久しぶりね、ルイズ・フランソワーズ！」  
間違いない

アンリエッタ女王陛下だ

「っ！その声は！アンリエッタ女王陛下下！」

バツとフードをとる

女王陛下の素顔が現れた

なるほど…

ふむ。確かに美人だ。サイトも喜ぶ訳だ

二人は抱き合って懐かしんでいた

俺は…

居心地悪い

最高に悪い

とりあえず、部屋から出よう

外へ出ようとする、  
「あ、エイジ！どこに行くの？」

とルイズ

「まあ、貴方はルイズのボーイフレンド？…ああ、ルイズの使い魔さんね！ああ、見ていただけでうっとりしてしまうわね、ルイズ・フランソワーズ」

とアンリエッタ

どこに行くのって、居心地悪いだろ！

どう考えても悪いだろ！

「あなたはいいい使い魔を召喚したわね、ルイズ」

と再びアンリエッタ

「ええ。いつ見ても身が蕩けてしまいそうですわ」

とルイズ…

をい

おかしいだろ！

ルイズの設定、誰か弄ったか？

誰かルイズを直してやってくれ

俺は軽く会釈をすると、外に出ようとした

「ああ、使い魔さん、待って！今日は二人に頼みごとがあるの」とアンリエッタが言っていて、俺は外に出られなくなった

「なるほど。手紙の奪還ですか」

いや、知ってたんだけどな

「是非その任務、この私めにお任せください。必ず、やり遂げます

！」

とルイズ

「心強いわ！ルイズ・フランソワーズ！」

とアンリエッタ

むっ！

確かここで…

そうか、思い出した

「ちょっと失礼あそばせ」

俺はそう言つとドアの方にいき

「名に聞いてやがる！盗聴魔！」

と、扉の近くにいたギーシュを蹴りで吹き飛ばした

「ダギヤオロピアアッ！」

何とも言えない面白い声を発声した

壁にぶつかり、ギーシュは気を失った

俺の声に気づいて出てきた生徒に、お気になさらず、と微笑んで手を振った

ずるずると部屋までギーシュを運ぶ

「エイジ？何やら廊下ですごい声が、つて！ギーシュ？どうしたよ？」

「ギーシュがな、今の話を盗み聞きしてたから連れてきたんだよ」

「「な!?!」」

と二人は驚く

「……………どうします?」

「……………今の話は、流石にまずいわね」

気絶してるギーシュの運命を決める会議中である

まだ気を失ったままだ

いい加減起こそう

「おい、ギーシュ！ギーシュ・ド・グラモン！起きろよ！」

ぴしぴしとギーシュの頬を叩いた

反応なし

反応したのは、女王陛下だった

「っ！グラモン元帥の…！」

「息子であります！女王陛下！」

がばつとギーシュは跳ね起きた

おもしろいなこいつ

「その困難な任務、私にもご命じ下さい！」

ギーシュは片膝について頭を下げた

「まあ、あなたも参加してくださいますか？私の大切な友人を守ってあげてね」

アンリエッタがそう言うと、

「ひ、姫様が僕に、喋って、下さった！トリスティンの可憐な花が

！僕は、なんて幸せ者なんだ！」

といい終わると、見事に気絶した

冷や汗を流すアンリエッタ

苦笑する俺とルイズ

こいつ、なかなか面白いな

ギーシュ、お前、気にいったぜ！

## 男の一騎討ち

「おかしいな。護衛の人が来る筈なんだけど…」

正門で護衛の人を待っている俺達

裏切り者のワルドがそろそろ来る筈だ

でも、小説通り、裏切るか分からないが

ウエールズ皇太子には生きて欲しいな

無理矢理持つて帰るか

いや、そんな事したら話が狂うな

俺はどうしたらいいものか…

『何考えてやがる、相棒』

背中でカチカチと音を鳴らしながらデルフが話しかける

「いや、なんでもねえよ…」

何でもなくねえけどな

暫くすると、空から大きな羽音がした

「待たせてしまったね」

立派なグリフォンに乗ったワルドのご登場

かっこいいな！

ワルド？いや、グリフォンですけど

ワルドなんかに興味ない

あんな裏切り者なんか…

あ、ルイズの頬が赤くなっているよー

「大きくなったね、僕のルイズ！」

あー、場所考えてほしーなー

うっとうしーなー

抱くなよなー

変態ロリコン親父がー

「……………子爵様」

だーかーらー

場所考えてほしーなー

いー加減うぜーよ

僕、きれちやうよー

スイッチ入ったよー

大爆発!!!

「手前ら！いつまでも人前で抱き合っつてんじゃねえ！見苦しいんだよ！自重しろ！その変態ロリコン親父！ルイズから離れる！この腐れ…ん！んん！フグング！」

後ろからギーシュに口を抑えられていた

「やめときなよエイジ。今は二人の懐かしい再会なのだよ？黙って見ないふりをしておこう」

やっとルイズから離れた変態ロリコン親父は、笑顔を崩さず

「これは失礼。あまりにルイズが美しくなっていたから気がつかなくったよ」

ハハハハハッ

ワルドは豪快に笑う

何が気がつかなくったよ、だ！

だから腐れ野郎なんだよ！

「お前ら、今日の任務分かってるんだろうな！」

俺は念を押しておいた

俺以外頷く

「よし、では諸君、出発だ！」

ワルドの高らかな号令でトリステイン魔法学院を出発した

「ねえねえ、あのグリフォンに乗ってるダンディな方は誰かしら？」

「……………トリステイン魔法衛士隊長」

「よく知ってるわねタバサ。私はエイジの方が好みだけど、タバサは？」

「……………エイジ。父様に似ているから」

「そう。ところで、どこに行くのかしら？」

「……アルビオンに密命で行く」  
「っ！なんでそんなこと知ってるの？」  
「……盗み聞き」  
「……タバサ、そんな事したのね……。エイジを危険な目にあわせられないわ！私達も追うわよ！」  
「……分かった」

さて、魔法学院を出発してかれこれ六時間が経つ

この間、ワルドは獅鷲グリフォンを疾駆させっぱなしだった  
エイジたちは二回ほど、途中の駅で馬を交換したのだが、ワルドの獅鷲グリフォンは疲れの片鱗すら見せずに走り続けている  
なんとというか、乗り手に似て素晴らしくタフなヤツだった  
「ちよつと、ペースが速いんじゃない？」

抱かれるような格好でワルドの前で跨っているルイズが、後ろを振り向きながら言った

雑談を交わすうち、ルイズの喋り方は過去むかしののような丁寧なものから、現在いまの口調へと変わっていた

まあ、主にワルドがそうしてくれと頼んだせいではある

「ギーシュもエイジも、へばつちやつてるわ」

そう言われて、ワルドは後ろを向いた

二人は、首に倒れこむような格好で馬にしがみついている

確かに、今度は馬より先に、二人が参ってしまった

「ラ・ロシエールまで、出来れば止まらずに抜きたいんだが……」

「無茶よ。普通は馬で二日かかる距離なのよ？」

「へばつたら、置いていけばいい」

「そういうわけにはいかないわよ」

ワルドが、少し怪訝げんな顔になった。

「どうして？」

「どうして、って……」

今度はルイズが、少し困った顔になった

「だって、仲間じゃない。それに、使い魔を置いていくなんて貴族メイジのすることじゃないわ」

「やけにあの二人の肩を持つね。どちらかがきみの恋人かい？」

ワールドは、笑いながら言った

「エ、エイジは、私の使い魔だけよ」

「そうか、それはよかった。婚約者に恋人がいる、なんて聞いたらショックで死んでしまうからね」

笑いながら言うワールドに、なんだかルイズは恥ずかしくなってしまう

った  
照れ隠しが、半ば反射的に口から出てしまっ

「お、親が決めたことじゃない」

「おや？ ルイズ！ 僕の小さなルイズ！ きみは僕のことを嫌いになったのかい？」

「もう小さくないわ！ 嫌いなわけではないじゃない……」

それは、とても突然だった

今日は船は出港せずに、次の出港が明後日と聞いて旅館に向かった  
やれやれ、途中誰にも襲われなかったな

と思っていると、

「君、エイジ君と言ったね。唐突だが、僕と決闘してくれないか」  
とき

ふざけてるのか

ふざけてるのか、をい！

そんな唐突な決闘があるか！

「ちょっと！ 決闘なんかしちや駄目よ！」

ルイズが走ってきた

ワールドが答える

「貴族というのは不思議な生き物でね、相手より強いか弱いかと思うういてもたつてもいられなくなるんだ」

とかほざいていやる

この変態ロリコン親父が！

「分かった…そんなに死にたいなら、俺が相手をしてやる！」  
決闘を引き受けた

ルイズには本気でやるなって言われたけど、俺とそこまで器用じゃないから

「言っとくけど、手加減とかしませんからね」

「もとより私もそのつもりだ」

ワルドの懐に飛びかかる

袈裟斬りをかます

が、ワルドはバックステップで避ける

「甘いな！」

ワルドは細剣のような杖で、風の魔法を放ってきた

エアカッターだ

デルフで受け止める

エアカッターが顔を掠める

危ねえ！

「私の二つ名は『閃光』。閃光の如く速攻で終わらせてあげるよ」  
ワルドは素早くエアハンマーの詠唱をする  
ここぞとばかりに剣を突き立て突進する

「うおおおおお！」

サイドステップでワルドはかわす

だが、それも読み切っていたこと

素早く方向転換し、足を引っ掛ける

しかし、エアハンマーの詠唱が終わり、突風が飛んでくる

辛くもデルフで受け止め、少し後ろに押された

「やるではないか！」

「ふん。お前もな」

互いに寝め合いながら決闘をする

魔法を詠唱する間は、こっちがかなり有利だ

魔法を使わせればいい  
ジリジリと詰め寄る

「ったあ！」

低く速く跳躍し、ワルドに一気に近づく

「であ！」

デルフを横薙ぎに振るう

ワルドの前髪が少しだけ落ちる

「くっ！」

ワルドも素早く応戦し、斬りかかってくる

突きをかましてくる

「ぬっ！」

俺は横に少し避ける

服が少し裂けた

傷は…ない！

大丈夫！いけるぞ！俺！

スライディングしてワルドの足下に潜り込み、サイドローリングし

てワルドの背中をとらえる

完璧な流れだ

逆袈裟斬りを振り上げる

決まった！

と思ったが、ワルドは俺をジャンプで後方で飛び越え、今度は俺が

背中をとられた

まずい！

体を半回転させてデルフで杖を受け止める

が、受け止められない

体制を崩してしまった

やられる！

やられなかった

なぜかというとな……………

「あら、いい男が決闘してるじゃない」

「……………味方どうしが決闘しないで」

キルケとタバサ、それにシルフィードが空から降ってきた  
油断していたワルドは、シルフィードの風圧で飛ばされていた  
結果、引き分けか？

いや、あいつ勝ったつもりになっているな

「……………これで分かっただろう。あの使い魔は君を守れない！」  
俺、負けてないけど

ワルドのやつ、少し焦ってるし

「今のは引き分けでしょ！ワルドの勝ちじゃないわ！」  
とルイズ

あーあ

もう原作とかどうでもいいや

どーにでもなっちまえ

俺、原作通りにやらないからな！

## 男の一騎討ち（後書き）

一部完です。

本当はもう少し続けたかったのですが。

次回からは、シャナとのクロスをやってみようかと。  
続きを期待していた方、申し訳御座いません。

## 裏切り者

俺たちは無事に手紙を取り戻した  
何もかもうまくいっている

いっそのこのまま、反乱もなくなっちまえ  
と思うが、やはり外は物騒であった

因みに、俺たちは今、教会の中だ  
よくRPGで出てくるような教会だ

そんなこんなで、今まさに結婚式の途中である  
まあ、どうせここでワールドが裏切るだろうな

怪しまれないように、警戒をする

この、ルイズとワールドの結婚の仲立ち人は、アルビオン最後の王族、  
ウエールズ皇太子だ

「新郎ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワールド子爵。汝は始祖  
ブリミルの前で、この者を永遠に愛すと誓うか」

やや間があって

「誓います」

静かにワールドは答える

「では、新婦ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァ  
リエール。汝は始祖ブリミルの前で、この者を永遠に愛すと誓うか」  
やや間があく

「……………」

少し間があく

「……………」

「……………新婦？」

ルイズは答えない

ルイズにとつて、ワールドは憧れの存在だった

好きでもあつたはずだ

でも……………」

今のワルドからは、何も感じない  
久しぶりに会った時から分かっていた  
何かが違う

心にもやもやしたものが渦めく

「……新婦は、この結婚を望まぬか？」

ウエールズが聞く

「……私は……」

ルイズの言葉が放たれた瞬間、教会に大きな衝撃が走った  
教会全体を揺らすような爆音

「な、！なんだ！」

「よく分らんが、逃げるぞ！」

結婚式は取り止め

そんな暇は無い

急いで非常口から外に出る

そこには

「アルビオンを倒せ！ウエールズを殺せ！」

わあ！と鬨の声

「ま、まさか、こんな時にレコン・キスタが……！」

まさか、こんな展開、最悪だ

「ウエールズ様、ここは逃げましょう！急がないと……」

ウエールズは首を横に振る

「いや、ここで逃げる訳にはいかないんだ！」

それだけ言うと、ウエールズは敵に一人で向かっていった

それにワルドが続く

「くっ！君達は先に逃げるんだ！」

ワルドも、敵に向かっていった

俺は、俺の足も、自然と敵に向かっていている

なぜだろうな

行こうとする体を、ルイズが止める

「何するんだルイズ！その手を離せ！」

「嫌よ！」

「どうして！」

ルイズの方へ振り返る

ルイズの頬に、雫が流れていた

「……いやよ。絶対いや。行かないで！行かないでえ！」

泣きついてくるルイズを、そっと離し、頭を撫でる

「大丈夫だよルイズ。絶対戻ってくるよ。……キュルケ、タバサ。

ルイズを頼む！」

ルイズを預け、俺はウェールズの後を追う

敵は予想以上に多かった

三人では、確実にやられる

「ウェールズ様。俺も、参戦します！」

背中からデルフリンガーを抜き出す

「何でついてきたんだ君は！」

ワルドが魔法を詠唱しながら怒鳴る

「わざわざついてこなくても良かったのに」

とウェールズ

「気がついたら、体が勝手に動いていたんです。これが、俺の一番正しい事だと思ったからです！」

左手のルーンが光り出す

「いくぜデルフ！」

『おいおい相棒。娘っ子を泣かしちまったな』

「うるせえ！今はこっちに集中だ！」

迫り来る敵に斬りかかった

敵には、メイジがない

実にやりやすい相手だ

でも、敵を斬るのはこれが初めてだった

「うらあ！」

剣を振り下ろしてきた兵士の攻撃を簡単に避ける

「遅い！」

デルフを横薙ぎ払いに振るう

初め

相手の体に当たる感覚

次

肉を少し切り裂く感覚

次

肉を抉り、内蔵を切り裂く感覚

最後

相手の体を、上半身と下半身にすっぱりと斬りわけける感覚

時間にして、僅か0・05秒以下

その一瞬が、これほどゆっくりと感じた

悲鳴も無い相手の死体が目の前に転がる

自分が殺した

自分が殺した自分が殺した自分が殺した自分が殺した

自分が殺した自分が殺した自分が殺した自分が殺した

自分が殺した自分が殺した………

エイジは、後戻りできない罪悪感に襲われた

「—————っああああ！」

苦しい

吐きそうだ

手に残る感覚が気持ち悪い

肉を引きちぎる感覚

だが、敵はそんな自分に関係なく斬り込んでくる

その度に、あの感覚

時間は少しも経っていないが、俺は精神的に疲れた

これ以上、人を殺したくない

地面に倒れこむ

後ろから、声が掛かった

「エイジ！大丈夫！しっかりして！」



神々しい姿は、神そのものだった

美しく、それでいて恐ろしい

美しいその爪は、天空に振り上げられ、レコン・キスタの兵を、全員貫いていた

一振りで、およそ5万の大軍を壊滅させた

## 裏切り者（後書き）

結局続けることにしました。  
これからも、よろしくお願いします。

## 悲しみから誓いへ

……ここは、どこだろう……

俺は……何してたんだっけ？

何も思い出せない……

いや、一つだけ忘れられないことがある

ウェールズの死である

あの瞬間が、鮮明に蘇る

いやだ……思い出したくない……

「……エイジ。やっと起きたのね……」

ルイズの声が上から聞こえる

そして、目の前にルイズが現れる

「よくやったわ……本当に……」

ルイズの目から雫が流れ、頬を伝い、遠くに飛んだ

飛んだ……？

「ここは……？」

今、俺は、どこで、どんな状態なのか……

雲の動きが速い

「俺は……」

いつ、どこで……

体を起こし、あたりを見回すことで、やっと理解できた

ここは、シルフィードの上だ

トリステインに帰還中

アルビオンはもう見えない

相当遠くまで来たようだ

「……俺が……」

そうだ、俺が全て悪い

ウェールズを助けられなかった

ルイズさえ、助けられないかと思った

俺の所為で全てがめっちゃくちゃだ

「……俺は、何もできない、ちっぽけな、人間だ……」

エイジの言葉を、ルイズが止める

強く、強く抱きしめて

「……そんなこと言わないで、エイジは何も悪くないわ。悪いのは私……」

しんと静まり返る

誰も言葉を発しない、重々しい空気

この状況で、何かいうのもへんだけど

（背中がとつても悲しいムードなのね。早く帰りたいのね。きゅいきゅい）

シルフィードはそう思いながら、トリスティンへと帰っていった

「……そう。よくやったわね、ルイズ・フランソワーズ」

手紙を、アンリエッタに渡す

暫し沈黙

「お役に立てず、申し訳御座いません」

ルーンはそう言うと、跪いて頭を下げる

「顔を上げて、ルイズ・フランソワーズ。本当に、ありがとう……」

アンリエッタは、涙を流していた

ルイズの後ろで、俺も、誰にも覺られないように涙を溢した

男なのに、情けないよな……

部屋に戻ってくると、疲れがどつときた

フラフラとベットに歩み寄り、倒れた

ルイズも、疲労が溜まっていてなのか、かなり疲れた顔をしている

疲れない方が不思議だけど

俺は結局、この少女を守ることしかできなかった

いや、この少女さえ守れなかった

悲しい思いをさせてしまった

だから守れていない

俺は本当にルイズの使い魔でいいのか？

「……ルイズ」

「どうしたの？」

「俺は……」

「俺は？」

守れているのだろうか

ルイズのこと、しっかり支えているのだろうか

「ルイズを……」

「私を？」

「きちんと守れているのだろうか……？」

……

沈黙が続く

「やっぱり、駄目だよな……」

「そんなこと言わないでよ！」

ルイズが言葉を強く発する

その勢いに、俺は押される

「……ルイズ？」

「エイジみたいに、弱気なのに、全て自分に押しつけて、苦しんで

いく人、嫌いなよ！エイジだけ苦しまないでよ！やめてよ！」

ベットに倒れている俺を、言葉が押さえつけているようだった

「……ごめん」

「エイジにはお仕置が必要ね。この国では、目を瞑って黙想しな

がら反省するの。目を閉じて」

エイジは言われた通り、目を閉じる

どんな事されるのだろうか

鞭打ち100回位……そのくらいじゃ生温い

もつと罰を受けなければならぬ

どんな事でもしなければいけない

「体を起こして」

俺は、倒れた体を起こす

「これ以上悲しまないでね、絶対に」

ルイズの声を、さつきより近くで感じる

絶対に、の言葉が終わるころ、ルイズと俺の唇が重なった

ルイズが腕を俺の体に回してくる

俺もルイズを抱きしめた

長い間、この状態は続いた

そっと離れ、互いの顔を見る

「エイジは、何回私のお仕置きを受けたいの？」

「……次は、お仕置きじゃなくて、祝福でしょう」

二人はそう言い合うと、再びふたつの唇を合わせた

## 恋する乙女

エイジは朝早くに目が覚めた  
外は、まだ双月が輝いていた  
双月の光が、優しく照らす

エイジはベットの隣に寝ているルイズを見た  
昨日重ねた唇

昨日守ろうと思った存在

寝ていると、女神のように美しいルイズ（寝ていなくても美しいが）  
は、まだ起きそうにない  
日本の時間でいう、午前3時30分頃か  
起きるには早すぎる

俺は体を倒し、再び息を整えた

暫くして、今度はルイズが目を覚ました  
なんでこんなに早く起きたんだろう

眠たい頭でそれだけ考えた

ふと横を見ると、エイジが寝ていた

まだ寝ているようで、スヤスヤと眠りの中だった

初めてエイジを召喚した時を思い出す

ルイズは、本当に一目惚れした

初めてワルドと会った時よりも更に激しく

整った顔立ち

この世で一番かっこいいと思う顔

美を追求して、その最終段階のような

エイジを見ると、おそらく一目惚れしない者はいない

あのタバサでさえだ

キュルケは遊びだろうけど……

エイジを見ていると、心がキュンとなる

私はエイジが好き

だけど、エイジはどうなんだろう……？

私がただ主だから付き添っているだけなんじゃないの……

その寝顔が、とても憎たらしく思えてきた

全ての女性を魅了してしまうエイジに、もう一回近付きたい

そう思うと、手が勝手にエイジの頬を撫でていた

撫でられた本人は何ともないが、撫でた本人は勝手に顔を赤めていた

エイジを撫でながら、ルイズは思う

（そういえば、エイジって私に好きだっていつてくれた事なかった

わね。いつそ、惚れ薬を飲ませてみようかしら……）

悪い考えが頭を巡り、辿り着いた先は、悪友のモンモランシーだった

モンモランシーに頼んで作ってもらおう

そう思いながら、再び眠りについた

ある少女は夢を見た

そこは、パーティの会場

その中に、幼い時の少女がいた

小柄でサファイアのような髪の毛

美しい瞳の少女

手を繋いでいるのは、少女の母親である

二人で楽しく会話していると、一人の男が目の前に現れた

手には水の入ったグラスを持っている

その男が、それを渡してきた

「ほら、シャルロット。受け取りなさい」

母の優しい言葉に頷き、少女はグラスを受け取った

それを飲もうとすると、急にその男が怪しい笑みを含んだ顔になる

「待った！」

どこからか声が聞こえ、少女の手が止まる

振り向くと、少女の父親にそっくりな誰かが出てきた

見た目はよく似ているが、髪の色が違う

艶のある漆黒の髪の毛

そして、まだ若い

「こんなもの……」

さっと少女のグラスを取り上げ

「こうすればいいんだよ！」

床に投げつける

ガシャン

音がした瞬間、空間が捻れ、男は憎むべき者へと変わった

「ふははははは！よく気づいたな少年。ふはははははは！……！」

男はそれだけ言うと、捻れた空間のどこかに消えていった

捻れた空間が戻ると、なぜかシルフィードの上に父親そっくりな誰

かと乗っていた

「よう、タバサ」

誰かが話しかけてくる

「あなたは？」

と質問した瞬間、思い出した

ルイズの使い魔のエイジだった

「どうしてここに？」

「タバサを守るためだよ」

この何となく的な言葉が、ドキッとさせる

（私を守るため……）

「俺はタバサのことならなんでも知ってる。だから、協力してあげ

たい。タバサは、俺の大切な人だから」

（私が、エイジの大切な人……私のことをなんでも知ってる……）

嬉しいやら悲しいやらよく分からない

「でも、ルイズが」

「ルイズも守らないといけない。けど、今の俺にはタバサが一番大

切なんだよ」

え？

エイジの言っている意味がよく分からない

(何で私が一番なの?)

と少し思い、

(私のこと、そんなに……)

と大部分思っていた

「だから、俺の体に飛び込んでおいで。悲しかったことを全て受け止めてあげる」

その言葉を聞いた刹那、タバサはエイジの胸に飛び込んだ  
涙を流し、悲しいこと全てを吐き出した

その間、エイジはずっとタバサの頭を撫でていた

ちなみに夢である

恋する少女の空想は凄まじいのである

「お兄様はお姉様のつがいなのね?でもお姉様、これは夢なのね、きゅいきゅい」

シルフィードの一言で、淡い妄想から現実へと戻される

濡れた枕を抱く自分

(………夢、ね………)

裏切られた絶望と、微かに残る温かみ

自分の心はまだ少し興奮している

眠りを妨げたシルフィードにお仕置きすることを決めて、タバサの  
一日は始まった

## 惚れ薬は恐ろしい PART 1

「惚れ薬？なんでそんなものいるの？」

ルイズの悪友、モンモランシーは疑問系で聞き返す

「ちよつと、いろいろね……………」

ルイズがもじもじ言うと、モンモランシーはにやつと笑う

「エイジに使うのね？」

にやにや顔を崩さないで、ルイズに聞いただす

「え、えつとお……………」

「いいわ。作つてあげる。そのかわり……………」

「そのかわり？」

モンモランシーがさらににやにやと笑った

「今度、あなたの使い魔と二人きりにさせてくれれば、の話だけど」

その言葉に、ルイズは顎を外した

「は？ええ！何言ってるのよ！」

「じゃあ、作つてあげない。ルイズに作れるかしら？」

相変わらずにやにやして聞き返す

「うぐつ！分かったわよ！でも、ほんの少しだからね！？」

その言葉を聞いて、モンモランシーは真面目な顔に戻った

「……………材料は揃ってるわね。今すぐにできるわ」

そう言うと、モンモランシーは惚れ薬の調合を始めた

エイジは暇だった

今日は授業は無し

ルイズもどこかに行っているみたいで、俺一人（と一振り）だけだ

（なんにもすることないし、散歩でもするか）

ベットから起き上がり、部屋を出ようとす

と、その時、ドアがノックされた

（ん？誰だ？）

と思いながら、エイジはドアを開ける

そこにいたのは

「おお！エイジ、今は君だけなのかい？」

ギーシュだった

何でここに？

女子寮だぞここ

「なんでここにいるんだよ？」

「いや、ちよつと訳があつてね。……ルイズはいないのかい？」

「ああ、今は出かけてていないよ？でも、どうして？」

「実は、君に相談があつてね。中に入れてもらえるかい？」

俺は、ギーシュの相談に乗ることにした

「できたわ。これを少し水に入ればいいのよ」

モンモランシーが、何とも怪しい光を出す液体をルイズに渡す

「ありがとう。で、効果は？」

「量を調節しておいたから、大体一日よ」

一日、ね

何か少ないような気がするけど

もう少し、長いのを作って欲しかったな

とルイズは思う

貰った惚れ薬を見て、少しぼーっとする

「約束は守ってもらわよ」

モンモランシーの言葉に、ルイズはハツとなった

「あ、す、少しだけだからね！」

ルイズはそう言って、モンモランシーと別れた

「一年生の女の子が怪我をしていたんだよ」

「ふんふん」

「ちよつと足を怪我していてね。あ、そんなに酷い怪我じゃないよ」

俺は、ギーシュの相談を受けている

前置き長いな

「でね、その場で簡単に治療してあげているところを、運悪くモランシーに見られたんだ」

「ん？別に悪いことじゃねえじゃねえか？」

「悪いことだよ！僕が他の女の子、ましては年下なんかに手を出した、と思われたんだよ！」

ギーシュはそう言って抱きついてきた

男同士が何やってんだよ！

「分かったから離れる！」

ギーシュを軽く蹴飛ばした

「モランシーに誤解だという事を分からせてほしいんだ」

ギーシュは飛ばされながらそう言う

床に落ちると、ふぎゃ！と間抜けな悲鳴をあげて、気絶してしまった  
運悪くルイズが入ってくる

「ただいま……って！何でギーシュがいるのよ！……しかも気絶してるし」

「おかえりルイズ。こいつはかわいいそうなやつなんだ」

そう言つて、ギーシュを部屋から出した

「……で、ルイズ。手に持っている物は何だ？」

俺が指摘すると、ルイズは慌てたように、

「え？あ、なななな何でもないの！」

と手に持っている物を隠した

「もしかして……？」

「ほ、ほほほほ本当に違うの！えーっと、そう！紅茶を美味しくする物よ！今紅茶をいれるから！」

ルイズはそう言いながら、俺を部屋から追い出す

もういいわ、と言われ、中に入ると、紅茶が二つ準備されていた

「これ、何も入れてないよな？」

俺が聞くと、

「あ、ああ当たり前じゃない！」

入れたんだな

となると、これは賭だ

ルイズの座っている目の前に置かれている紅茶と、俺の座っている目の前にある紅茶のどちらかに、さっきの薬が混ざっているはず俺の目の前の紅茶だろう

いや、その裏をかいて、つてことも考えられるがいくら迷っても、ふたつに一つだ

「どうしたの？」

いや、どうしたの？じゃないから

さっきの薬、おそらくは惚れ薬だろうその効果がどれだけ続くか分からない一生きれなかったら……

覚悟を決めて、目の前の紅茶を飲んだすると、ほわつとした気持ちになったルイズを見る

しかし、気持ちに変化はないもう一度ルイズを見る

すると、ルイズの顔が青くなっていた

「どうしたんだルイズ？早くのみなよ？」

少しルイズを困らせてやる

「ほら、早く……ん？あれ？何か、すごく気分がいいきつと紅茶の所為だろう

ルイズを再び見ようとすると、いよいよ気持ちがおかしくなってきた「そんな！こつちだったのか！」顔を下に向ける

「ほら、こつち見なさいエイジ」

ルイズの笑い声が、悪魔の笑い声に聞こえる

ここにいたらまずい

「ごめん！」

俺はそう言って、部屋から出た

一人にならないと

「あらエイジ？どこへ行くの？」

目の前からキュルケの声がした（エイジは顔を手で隠して移動中）

「ごめん、一人になりたいんだ！」

急いで離れようとすると、キュルケが腕に絡まってきた

「ルイズと喧嘩したんでしょ？だから一人になりたいのね？」

「そういう問題じゃないんだ。手を放してくれ！」

「分かったから、私の部屋に来なさい」

キュルケはそう言うと、更に絡まってくる

腕に柔らかいものを感じる

が、本当にそれどころじゃない

「こういうことはしたくないんだけど……」

片手で顔を隠し、片腕でキュルケを軽く投げ飛ばした

急いで離れる

「本当にごめん！」

俺はそう言って、この場を離れた

あっけなく飛ばされたキュルケだけがこの場に残る

そこに、ルイズが走って来た

「だ、大丈夫キュルケ？それより、エイジは来なかった？」

キュルケはクスリと笑うと、

「私の誘いを振って、逃げて行ったわ。ああいう男もそられるの

よね」

キュルケは倒れた体を起こし、腕を組む

「それにしても、ちょっと様子がおかしかったわ。どうしたのかし

ら？」

「実は……」

俺は逃げた

一人になれる場所を探した

探して走っていると、誰かとぶつかった

「いってえ……ごめん……はっ！」

ついうっかり目を開けてしまったのだ  
そして、俺の下敷きになっていたのは

タバサだった

タバサも、本を読んでいたみたいで、こっちに気がつかなかったん  
だろう

タバサと目があった

すると、どうしようもないような、苦しい気持ちになった

「……重たい」

タバサを押し潰していることも考えないで、いろいろな気持ちが頭  
を巡る

「駄目だ……」

起き上がりながら俺は言う

「……何が？」

「俺にはタバサしかない」

この言葉に、タバサは耳を疑った

俺も、何でそんな言葉が出たのか分からない

でも、これが俺の気持ちで本当の気持ちだった

よく分からないが、何故かそうなのだ

「……何言ってるの？」

俺も何言っているのか分からない

でも、本当にタバサしかないのだ

「とりあえず、部屋に戻ろうタバサ」

何故か俺はそう言って、タバサをお姫様抱っこしていた

## 惚れ薬は恐ろしい PART 2

「何でそんな物使ったのよ」

「だ、だって……そんなことより、……あっ！」

「どうしたのルイズ、って、あっ！」

二人の目の先には、お姫様抱っこをしているエイジとお姫様抱っこをされているタバサがいた

「……」

少しの間

「何してんのよタバサ！」

ルイズの怒りが爆発した

「彼がこうしたから」

抱っこをされているタバサが答える

そして少し笑う

ぐぬぬぬぬ……！！！！

ルイズが唸る

「とにかく、エイジから離れて！そんなことしていいのは私だけよ  
！」

「なら、彼に聞けばいい」

そう言っつて、タバサからエイジに更に近づく

ルイズの沸点は軽く超えていた

「まあまあ、薬がきれれば元通りになるわよ」

キュルケが慰める

「え？薬……」

薬、と聞くと、タバサは少し悲しそうな顔をした

？どおりで変だと思った

でも、別に構わない

刹那の間でも、こうしていたい

「そう薬よ！薬がなかったら、私の方が絶対いいに決まってるわ！」

ルイズが強くい張る

と、そこに予想外の答えが返ってきた

「薬？俺はありのままの俺を曝け出しているだけだ」

とエイジ

この言葉は、ルイズにはきつかった

瞬間、ルイズの目から涙が溢れ出した

「く、薬の所為なんだから！」

号泣しながら、ルイズは自分の部屋へと戻っていった

「部屋に戻るよタバサ」

ルイズには申し訳ないことをしたな、と思いながら部屋に戻るタバサだった

とりあえず、保険のためにキュルケがついてきた

タバサの部屋は質素で、本の量が半端じゃなかった

「エイジ」

「何だ？」

「ルイズにあんなこと言って良かったの？」

いけないはずだ

でも、俺の気持ちは本当なのだ

真実を言って何が悪い

「分からない。でも、俺はタバサが一番なんだ」

ベットに腰掛けたエイジとタバサをドアの近くで見張るようにキュルケがいる

エイジがタバサにキスを迫る

タバサもそれを受け入れようとする

「ちよつとタバサ！それはまずいんじゃない？」

キュルケが止めに入った

これから面白いことになる、という期待もあったけど、さっきの「」ともあって、流石にルイズにかわいそうだと思ったからキュルケが止めに入ったのを、タバサは恥ずかしく思った

キュルケがいることをすっかり忘れていた  
タバサは顔を真っ赤にして

「ごめん」

と言った

キュルケがいなかったら、どうなっていたことが……  
どっこい、キュルケは急用を思い出したようで、

「あ、そういえば、今夜は……」

と言うと、部屋から出ていってしまった

「エイジ」

「どうしたタバサ、いや、シャルロットって読んだ方がいいか？」  
エイジの言葉に、タバサは少し嬉しくなる

「二人きりならそう呼んで。それより、なんで私が一番なの？」

「俺が一番だと思ったからかな」

エイジはそう言うのと、唇を近づける

タバサも、それを拒まない

温かく柔らかいものが重なる

その時、エイジがタバサをベットに押し倒した

「ひゃあ？」

自分でもびっくりするような声を出したタバサ

「たまらないよ、タバサ」

そう言つて、もう一度キスを迫る

タバサの理性が壊れていく

「……抱きしめて、エイジ」

薬で人の心を狂わせるっていう最低なことをしている  
それは、私もされているのに、なんで分からないの？

でも、今は目の前にいる少年が愛しい

失いたくない

たとえ薬でも

私が彼を愛し、彼も私を愛してほしい

でも、それは無理なこと

「……もっと強く抱きしめて」

人の温もりを感じたのはいつ以来だろう

エイジの温もりを肌で感じた

惚れ薬は恐ろしい PART 3

違う……

何かが違う……

こんなの、違う！

タバサは抱きついているエイジを突き放す

「何するんだよタバサ」

違うの……

こんなの、やっぱり違う！

「違う……何かが違う……だから！」

薬を使って心を乱すなんて、あの男と同じこと

「俺の気持ちにこたえてくれ」

エイジがタバサにキスを迫る

違う……

違う……

だから、ごめん！

バシィ

タバサの小さな掌が、エイジの頬をしばいた

ごめん、エイジ

でも、今のエイジはエイジじゃないから

「気持ちには、こたえられない」

そのビンタに、エイジは目を覚ました

「あ、いってえ……ん？はっ！タバサ！あの……」

「分かってる……」

「そう……なんか、悪かったな」

「別にいい。今のエイジはエイジなの？」

「ああ、今の俺は本当の俺だ。なにもとらわれていない、自分自身だ」

戻った

これが本当のエイジ

私の好きなエイジ

私が求めているエイジ

「さつきは本当にごめん。でも、これだけは言わせてくれ。何かあったら、俺が支えてやる。辛いことがあれば、俺が受け止めてやる。これは、心を操作されても変わらないことだから」

ちよつと臭い台詞をエイジは言った

どういう訳か、私は泣いていた

ずっと一人だと思っていた

支えてくれる人はいないと思っていた

私だけがすべてを抱えて生きていけなれないと思っていた  
でも、自分を支えてくれる人が、目の前にいる  
受け止めてくれる人がいる

私は、声を上げて涙を流した

そんな私を、エイジは優しく抱きかかえてくれた

本当のエイジの温もり

「……今は、思いつきり泣いていいんだよ」

エイジが耳元で優しく囁く

暫くの間、私はエイジの胸で泣き続けた

私は泣き止んでもエイジから離れなることができない

相当泣いたから、顔がひどいことになっているはずだから

エイジは私の頭を優しく撫でてくれる

それだけで、私は気持ち落ち着く

エイジが私の使い魔だったら……と夢想する

と、その時、部屋のドアが開き、誰かが入ってきた

「ごめんあそばせて……バットタイミングだったみたいね」

「え、エイジ？もう、薬の効果はきれているはずよ？」

最悪のタイミング

ルイズとキュルケが入ってきた

入ってくる時くらい、ノックしてほしい

「それとタバサ！エイジから離れて！もう！なんでそんなにくっついてるのよ！」

エイジはあくまでもルイズの使い魔だ

言いたいことは分かる

でも、暫くこうしていたい

「る、ルイズ。これには訳が……」

それから暫くは、エイジを開放しなかった

ようやく開放されて、俺はルイズの部屋に戻る

ルイズはお怒りのご様子だ

京都の金剛力士像のような顔イメージだがをしている

部屋に戻り、ドアを閉めようとすると、キュルケが入ってきた

「薬を使われたと思ったなら、大人しく私にメロメロになれば良かったのに」

とルイズ

「その所為で、私は投げ飛ばされたわ」

とキュルケ

ルイズは顔が怒っているが、キュルケは笑っているので怖い

「……で、俺は今から何をされるのでしょうか？」

引きつった顔でルイズに聞く

「決まってるじゃない……服を脱ぎなさい！」

一瞬微笑んでからの鬼のような顔への変化

その凄技に少し感動する

って、服をぬぐって……

「エイジのこと、かっこよすぎるからって、油断してたわ。私以外の女に手を出すなんて！バカ犬！罰として、鞭打ち50回！」

ビシッと床を鞭で叩く

「鞭打ちかよ。しかも50回って」

「私の分も追加で50回ね」

キュルケが悪魔の笑いで俺を見る

「そ、それだけは勘弁してくれ！」

いくらなんでも体が持たない

「じゃ、じゃあ、私に『俺はルイズだけを愛しています』って10万回言うの、どっちがいい？」

なんかむちゃくちゃだな

「10万回言うから許してくれ！」

「分かったわ。ならさっさと誓う！バカ犬！」  
ふう

俺もバカ犬扱いされるようになったか

これedyouやく学院生活をエンジョイできる訳だな  
いろんな意味で

このあと、俺は本当に10万回言わされた

## いざ、宝探しへ 前編

「ごめんね、エイジ。本当にごめんね」

朝起きるなり、ルイズはこれだ

寝起きの頭でなんのことがさっぱり分からない

「何かしたっけ？」

いきなり訳の分からない状況で戸惑っている

俺何かされたっけ？

昨日の惚れ薬のことか？

「バカ犬、っていったこと、怒ってる？」

何だ、そんなことか

そういえば、昨日そうやって呼ばれたな

その呼ばれ方で、やっとサイトに近づけたと思った

「いや、全然。寧ろ新鮮で良かったかも」

俺がそう答えると、ルイズはほっとしたみたいだった

「よかった……昨日の夜。エイジが寝たあと、怒ってないか心配だ

ったの。優しいのね、エイジ」

ルイズはそう言うと、そつと俺を抱いた

俺も受け止めてやる

「もう、バカ犬なんて呼ばないわ」

「……ありがとう」

うーん

またサイトから遠ざかったか

やるなあ、サイト

二人が抱き合っていると、ノックもなくドアが開いた

「二人とも！これを聞いて……っあ！し、失礼しました！」

入ってきたのは、ギーシュだった

手には、何かの紙があった

美しい抱擁にしばらく見惚れていたが、邪魔してはいけなそうと思

急いで部屋から出た

「何だったんだろう?」

「さあ……?」

数秒後、ドアを叩く音がした

エイジがドアを開ける

入ってきたのは、またしてもギーシュだった

「いやぁエイジ。いいもの見させてもらったよ。羨ましいなあ。はははは」

そう言いながら、エイジの肩を叩く

ルイズは、頬を赤く染めて、

「別にいいじゃない」

と小さく言った

「んで?ここに何の用だ?」

俺が問う

「気が早いな君は。……実は、とんでもない物を手に入れたんだ!」

「「とんでもない物?」」

「そうさ。これを見てくれたまえ」

ギーシュは誇らしげに手に持っていた紙を差し出す

「龍の羽衣の在処さ。タルブの村にあるらしいんだ」

ギーシュは誇らしげにふふん、と鼻を鳴らす

「そこで、君達に宝探しを手伝ってほしいんだ」

とギーシュは言う

「楽しそうだな。俺はいいけど、ルイズは?」

「エイジが行くなら、私も行くわ」

「今の聞いた?」

「……盗み聞きはよくない、キュルケ」

「そうね。でも、楽しそうだね。ついて行きましょ、タバサ」

「そうする。……エイジも行くから」

「へ？何か言った？」  
「……………何でもない」

俺は今、タルブの村に向かっている

馬ではなく、タバサの使い魔のシルフィードで向かっている  
出発前、タバサとその使い魔だけの時、「お姉さま、少し重くなっ  
たのね？」というシルフィードの言葉にムカついてタバサが杖でフ  
ルボッコにしていたというのは余談

「いやあ、龍だと移動が早くて楽だなあ。はは」  
などと言っている……………

後ろから凄い怒りのオーラが……………  
一体誰だ？

振り返って見ると、ルイズが般若のお面のような顔をしていた

「ちよつと！何であんたがエイジの後ろなのよ！エイジの後ろは私  
よ！」

怒りの大喝

蜀の張飛にも負けられないような声に少しも動じず

「やーだ」

と言って細い腕をエイジに絡ませるのはタバサだった  
かつ、かわいい

タバサってこんなに可愛かったっけ？

今のは反則だぞおい！

「うつ……………、意外と可愛いじゃない……………つて、なああああああ  
にやってんのよ！ちびっこおおおおおお！！！！！！」

ルイズの小さな口を思いつきり広げて叫ぶ

「いいじゃない。あなたは乗せてもらっているのよ？」

とルイズの後ろからキュルケ

順番は、前からエイジ、タバサ、ルイズ、キュルケの順である

あれ……………

そういえば一人足りない気が

まあ、いいか！

「タルブの村までもう少しですぞ！」

「……………僕だけ……………」

「ん？どうしましたかな？」

「僕だけ、何でこんな扱いなんだあ！」

下では、コルベールとギーシュが馬車でタルブに向かっていったとか

## いざ、宝探しへ 中編

程なくして、タルブの村に着いた

シルフィードがぶつ飛ばしてきたので、早く着いた  
なぜシルフィードがぶつ飛ばしてきたかって？

それは、背中で暴れている奴がいるからだ

(背中で暴れられると鬱陶しいのね。早く開放されたいのね。きゅ  
いきゅい)

遅れてきたギーシュ(半泣き状態)とコルベール(髪の毛増えた?)  
と合流した

タルブはめちやくちや田舎で、空気がうまい

「この地図によれば、あっちですな」

何故か、コルベールを先頭に進んでいた

頭が眩しいぜ!

頭の不毛地帯だぜ!

最高だぜ、あんた!

と馬鹿げたことを考えていると、洞窟の前に辿り着いた

「この洞窟の奥にあるはずですよ!」

つるっばげは、一人はしゃいで洞窟に走っていった

俺たちはその後を追う

なにか変な気がする

洞窟に入った時からだ

俺たち以外に誰かがいる気が

咄嗟に後ろを振り返って見る

が、何も無い

「どうしたのエイジ?」

俺の隣でルイズが言う

「誰か、後をつけてきているような気がするんだ」

俺の言葉に、全員反応する

杖を構え、後ろを振り返る

俺はゆっくりとデルフを抜く

何者かが近づいてくる気配がする

近づいてきて、止まった

動かない

「そこにいるのは誰だ！分かっている。姿を現せ！」

俺が怒鳴る

「エ、エイジ…さん？」

出てきたのは、シエスタだった

「何してるのですか？」

俺の後ろで、皆がぼかーんとしている

「君の話によると、龍の羽衣は君の曾爺さんの物なんだね」

「はい。倉庫には鍵が掛かかっていて見たことはないのですが」

コルベールが興味心身に話を聞く

コルベールはこういう物が大好きなのだ

見つけに行つては、必ず意識不明の重体で帰ってくるのだが…

それはさておき、すぐにそうこの前に辿り着いた

「ふむ。このくらいの魔法なら、私でも解くことはできますぞ」

コルベールは杖を取り出し、魔法の詠唱を始めた

その途端だった

一瞬にして周りが黄昏の色に染まった

(なんだ!?)

見渡すと、止まっている皆

魔法を詠唱しているコルベール

そらを飛んでいた鳥

雲の流れ

落葉まで、全てのものが止まっていた

(は？なんだよこれ？なんの冗談だよ？)

突然の出来事に戸惑うエイジ

「おや、面白いものがあるねえ」

森の中から女の人のような声が聞こえた

「誰だ！」

動かない森に向かって叫ぶ

しかし、返事はなし

「そこにいるのは分かっている！今すぐ出てこい！さもなければ……」

デルフに手を掛け、抜き放つ

「力づくで探すまでだ！」

動かない森に叫ぶ

暫くの沈黙

そして、

「ふふ」

という不気味な笑い声と共に、声の主が現れた

すらりと長身

顔は整っていて、足が長い

見た目20歳前後の女性だった

「どうやら、ただのガンダールヴではないようだねえ」

長身の女性はじろじろとエイジを見る

エイジは金縛りにあったように、ぴくりとも動けない

「ふふ、いい子だねえ。ところで、私が誰だか分かるかい？」

にやつと笑い、長い小指の爪でエイジの頬をなぞる

「……しる、かよ……！」

動かない体を懸命に動かそうとし、言葉を喋る

「おやおや、そんな言葉遣いはよろしくないねえ。ふふ」

エイジに笑いかける

美しい笑い顔なのだろうが、この笑いが、恐怖に陥れる

「そんなに怯えなくてもよろしくてよ。ほら、すぐに楽になるからねえ」

ふっ、と体が何かから開放された  
手足の感覚が戻り、少し楽になる

「どこのどいつか知らねえが、一体何をした！」  
我ながら凄まじい剣幕だと思った

が、特に動揺した様子はなく、言葉を続ける  
相変わらずにやっとな笑いながら

「気になるのかい？ふふ」

聞く者を恐怖に陥れるような笑いだ

「……お前、レコン・キスタの人間か！」

『レコン・キスタ』という言葉に一瞬だけ眉根を寄せた

「レコン・キスタ。そんな屑どもの集まりの者ではないよ。でも、  
あいつらを眺めるのもまた一興。ふふ」

眺める……？

エイジにはよく理解ができなかった

理解できたのは、目の前の女性がレコン・キスタの人間ではないと  
いうことだけだ

「……じゃあ、お前は一体」

女性は、ふふ、と少し笑い、言葉を続ける

「私の言葉を聞いても、お前は信じないと思うけどねえ。……私は、  
この世界でいう、創造神にあたるもの。ここまでは分かるかい？」

はい、せんせーい。早速理解できませーん

「意外と物分りが悪いんだねえ。……少し前、ビックバンの説を語  
った者がおっただろう？」

(少しまえ？かなり前のような気がするのは俺だけ？)

「あの説はあらかた正しい。しかし、なんでビックバンは起こった  
か。それは、私がこの世界を興したからだからなんだよ。“無”の  
世界に私の力を注ぎ込んだ。それがビックバンとも呼ぼうかね。  
ここまでは分かるかい？」

分からないので、とりあえず頷けばいいや



## いざ宝探しへ 後編

女性はクスリと笑うと、顔をエイジに近づける

「物分りが良いねえ。それとも、ただ単に鈍愚なだけなのか……。じゃあ、これは分かってくれるかねえ、ふふ」

と言うと、女性はエイジの頬に手を添える

冷たい指の感覚がエイジの頬に感じる

エイジは反射で手を除けようとしたが、かなり力が強い

「おやおや。乱暴はしないでくれ。可愛い可愛い……私の息子よ。ふふ」

WHAT?

ぱーどうんみい？

(私の息子よ？……！)

「いい顔よ。私の可愛い可愛い子、ふふ」

女性はエイジを今度は抱きしめた

「な、何言ってるんだ、お前は」

震える声でエイジは問う

「面白い質問だねえ。だから、私の可愛い息子だと言ってるのが分からないのかい？」

その言葉を聞いて、エイジは分かった

(こんな状況はまずあり得ないけど、もしかしたら、殺される……？)

震えが体を走る

恐怖か、絶望感か、怒りに似た感情か……

それらが、体の震えを止まらせない

「ば、ばか言え。俺は小野家の長男だ。な、何で、お前なんか、俺の何でもないだろ？」

「今は分からないさ。でも、いつかは知って貰わないといけないことがある。……大丈夫、殺しはしないよ。死んでしまったら、世界

が崩れるかもしれないからねえ。……そうそう、その倉庫には、お前に役立つ物がある。この袋に入れて持って帰るといい。……また来るわ、伝説の使い魔。私の可愛い息子、ふふ」

目の前の女性は早口にものをいうと、消えて行ってしまった

「ちよつと待てよ！おい！」

エイジが叫んでも、戻ってはこなかった

時間がまた動き出す

「……どうしたの？エイジ」

気がつくのと、皆が不思議そうな顔でエイジを見ていた

ルイズが心配そうに覗いてくる

何でもない、と言えば嘘になるし、第一そんな嘘はすぐにはれるだろう

「え、えつとな。寝ぼけてたんだ。そうだ！歩きながら寝てたんだ

俺。は、はは」

余計に白々しくなったよ、おい

そんな嘘が通用するか

何でそんな事言ってしまったんだよ俺

「器用な事するのね、ダーリン」

とキュルケ

「あまり面白くないなあ、エイジ」

とギーシュ

「……戯言」

とタバサ

「私がかきましたかな」

とコルベール

皆の視線が痛いっす

こんなに白けた事なかったよ今まで

「と、兎に角、中に入れてみよう」

さっきの女性が置いていった袋を拾い、皆を促した

コルベールが鍵を外し、扉を開くと、普通はあり得ない光景が目の前に広がった

「こ、これは……」

コルベール驚愕の声

扉の向こうは、何故か外よりも広がった

「な、何でこんな物が……？」

そして、その中にある物は、零戦だけではなかった戦争に使われるありとあらゆる武器が置いてあった

「むむつ。見た事ないようなものばかりですな。いやいや、興味深い」

「……場違いな工芸品」

場違いな工芸品で倉庫は埋め尽くされていた

エイジは、その場違いな工芸品の中から一つハンドガンを手にした（間違いない。デザートイーグルだな。使い方も全部わかる）

デザートイーグルを手を持っていた袋に詰め込む

すると、デザートイーグルは袋に飲み込まれるように落ちていった

「な、ああ！き、きえた？」

袋の中は異次元みたいで、まるでド　えもんの四次元ポケットみたいだった

一人興奮しながらエイジはそこにあつた武器を詰め込んでいく

M9やベレッタM92などのハンドガンやAK47やXM8、M4

A1、FA-MAS、G36など様々な武器を獲得し、袋に入れた

エイジは、戦争は好きではないけど戦争ゲームは大好きなので、こういうのをみると興奮する

ご丁寧に、弾倉までも置いてあつたので、球が切れるという心配はなくなった

どうにか零戦を学院まで持ち帰った時は、既に夜だった

零戦を適当な場所に置き、ルイズの部屋に戻る

「ねえ、エイジ。その袋マジックアイテムみたいだけど、どこで拾

ったの？」

とルイズ

「その辺に落ちてたのを拾ったんだよ」

とエイジは言いながら、中身をだそうとするが、出てこない

「あ、あれ？」

袋の中を探ってみるが、なにも当たらない

袋をよく見てみると、注意書きが書いてあったが、残念なことにエイジには読めなかった

「ルイズ、読めるか？」

「ん？えーっと、『袋の中の物を取り出すには、ある言葉を発してください』だって。本当になんなのこれ？」

ルイズは袋をまじまじと見ながら不思議そうに言う

（物を取り出す時にいう言葉？となれば、あれしかないのか？）

チャカチャカ、パンパパンパンパーン

ド えもんのBGM（それもかなり昔の）が頭に流れた

「エイジ君のデザートイーグル」

できるだけ声をド えもんに似せて袋に手を突っ込む

すると、デザートイーグルが袋から飛び出してきた

「うおおおおおおお！これは四次元ポケットかああああ！」

一人狂喜する自らの使い魔を、ルイズは不審な目で見る

（エイジ、どうしたのかしら）

その後、エイジは狂ったように30分間もはしゃいだという

## 真実、そして激突

王室は不穏な空気が流れる

「アルビオンが大軍を率いて進軍してきているそうだ！」

「7万の軍隊がタルブに迫っておる！」

「対してトリスティンの兵力は2千。不利に違いはありますまい」

「このまま戦っても負けは見えている」

「陛下。どうかゲルマニアと同盟を」

とても憂鬱な気分になる

どうしてこんなに……

アンリエッタは深くため息をつく

「姫殿下。ため息はこれで5回目です」

隣に座っているマザリーニ枢機卿が声を潜めて言う

「貴方たちの話を聞けば、ため息は自然と出ますわ」

アンリエッタは椅子から立ち上がる

「姫、殿下？」

「大体、戦ってもいないのに、何故そんなに負け腰なのです？ 恥ずかしくないのですか？」

「殿下、落ち着いて……」

「お黙りなさい！」

アンリエッタの声が会議室に響き渡る

「トリステインは同盟を組まないと勝てない弱小国になったのですか？ トリステインの貴族は守るべき民を自国だけで守れないほど落ちてしまったのですか？」

アンリエッタはそこまで言うと、会議室に背を向けた

「貴方たちが出る気がないのならば、私だけで戦います。……兵を王宮の前に集めなさい！」

「姫殿下、これは将来のためです！」

「いいえ、それは貴方たちの将来のためです。私はそんな将来を見たくありません！」

ばたん！と会議室の扉を強く閉めてすたすたと歩いていく

目も当てられない修羅場へと

魔法学院では平凡な日々が続いていた

いつもと何も変わらない

ルイズはこの環境が好きで、心地よかった

キュルケは憎たらしいけど、嫌いではない

最近よく一緒に行動するタバサも、ギーシュも、学院の全員好き

しかし、そんな日々は長続きしなかった

「ルイズ、こんな手紙がきたけど」

エイジが一通の手紙を持ってきた

王宮からの手紙だとすぐに分かった

「何かしら……」

エイジから手紙を受け取り、急いで内容を確認する

「ルイズ、なんて書いてあるんだ？」

エイジが不思議なことを言った

「読めないの？」

「さあ？俺、この世界の住人じゃないし…」

「この世界の住人じゃない……。そう、やっぱりね…」

「あれ？言ってなかったっけ？ていうか、やっぱりって？」

「よく寝言で言ってたわ。『二ホンに帰りたい』って…」

「おいおい、俺は向こうの生活には飽きてたんだ。寧ろ、こっちに来て嬉しかったよ」

エイジは小さい子供を慰めるように言う

その表情は柔らかくて、でもどこか切ないように見えた

「私はずっと思ってた。エイジは私の使い魔でいいのだろうって。寝言を聞く度に苦しくなるの。エイジの全てを奪ったみたいで。私は、最低な人間なの…」

ルイズは急に感極まって泣き出してしまった

「泣くなよルイズ。心配するな。ルイズはいいことをしてくれたんだ。だから、泣かないでくれ。人が泣いているところを見るのは嫌いなんだ」

暫く沈黙が続く

そして、エイジが話を切り出した

「なあルイズ、聞いてくれるか？」

「何？」

ようやく泣き止んだルイズは落ち着いて言う

「信じられないかもしれないけど、俺はお前の未来が分かるんだ」

「……そう。で、未来はどうなっているの？」

「言ってもいいのかわからないんだけど……。ルイズは、虚無の使い手なんだ」

その言葉を聞くと、ルイズは目を大きく開いて啞然としていた

無理もない

「それ、本当？」

「ああ。多分もうすぐアルビオンがタルブに攻めてくる筈だ。ルイズは、その時に虚無が目覚めるんだ。で、目覚めの時に必要な物があるんだけど……」

「必要な物？」

なにしろ虚無の知識など全くないのだ

ルイズは少し混乱気味に聞く

「王家に伝わるルビーと『始祖の祈祷書』が必要になるんだけど、そういえばアルビオンに行くときに水のルビーは貰ったよな？」

「え？ええ、持ってるわよ」

水のルビーはアルビオンに行く前に姫様にお守りとして貰ったのだ

「よかった。それで、始祖の祈祷書なんだけど、姫様に貰えない？」

「頼んでみるわ。でも、何で未来のことが分かるの？」

ルイズの尤もな質問にエイジは、

「ただの直感だよ」

と曖昧に答えた

「かなり話が逸れたけど、手紙の内容は？」

話を元に戻すように話を反らせた

「さっきエイジが言った通り、アルビオンがタルブに攻めてくるらしいわ。姫様が直接赴くらしいから、ついて来てほしいって書いてあるわ」

「そうか。まずいな」

エイジは意味深長に言う

そんなエイジを見て、ルイズはさっきからただただ不安で一杯だった

「なにかいけないこともあるの？」

「本来のストーリーだったら、ルイズは姫様のゲルマニアとの戦略結婚の時のために祈祷書を渡されているんだ。でも、今ここには無いから至急貰わないといけない」

「？本来のストーリーって何よ？」

「えーつとだな。今は関係無いから取り敢えず祈祷書を優先して貰ってくれ」

ルイズはなにやら事情を知っているエイジの言葉に頷くほかはなかった

「来てくれたのね、ルイズ・フランソワーズ。私のお友達」

アンリエッタは両手を広げ、ルイズを抱擁した

「はい、姫様。姫様自らが戦場に赴くと聞いて驚きましたわ」

アンリエッタは微笑んで、

「トリスティンの男は皆軟弱ですもの」

といった

現在地はタルブ

たった2000の軍隊を率いて、アルビオン軍を今か今かと待ち構

えている

対してアルビオン軍は7万の軍隊

負けは明白なのだが、自分の国は自分で護るというアンリエッタの頑な気持ちがこれである

「ところでルイズ。何故始祖の祈祷書が必要な？黙って持ってきたのだけれど」

アンリエッタは始祖の祈祷書を取り出し、ルイズに手渡した

「実は、私は虚無の使い手だったのです」

ルイズは声を擧げていった

「まあ、そうだったの？それで、始祖の祈祷書となんの関係があるの？」

「虚無の使用条件は、王家に伝わるルビーと始祖の祈祷書が必要なのだといじ：使い魔に言われましたので」

「使い魔さんがね。……そういえば、使い魔さんは？」

アンリエッタはきよろきよろして周りを見渡す

しかし、エイジは見当たらなかった

「使い魔は、『龍の羽衣』なるものであとから来ます。最終点検が終わったら来るそうです」

「龍の羽衣？なになのそれ？」

「私にも分かりません。鳥のような形をした鉄の塊です。どうやら空を飛べるようですが…」

そこまで言うと、会話は途切れた

兵の様子が慌しくなってきたからだ

その内の一人が叫んだ

「敵襲だ！北方角上空に敵戦艦発見！」

軍隊全員上空を見渡す

ルイズもアンリエッタも戦艦を目視した

そして驚愕した

「な、何あれ……」

それは、あまりに巨大で見る者を圧倒した

7万という巨大な波に、トリステインの2000はあっという間に飲み込まれてしまいそうだ

「あんなの…勝てっこねえよ！」

誰かが叫ぶ

トリステイン軍は完全に狼狽していた

「死にたくねえ！」

「降参だ！」

乱れた軍隊の士気を高めるのは容易なことではない

「しっかりしなさい！まだ負けは決まっています！」

そんなアンリエッタの大喝も、幼い姫の独り言に過ぎなかった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7719i/>

---

ゼロの使い魔は超能力者

2010年10月15日21時19分発行